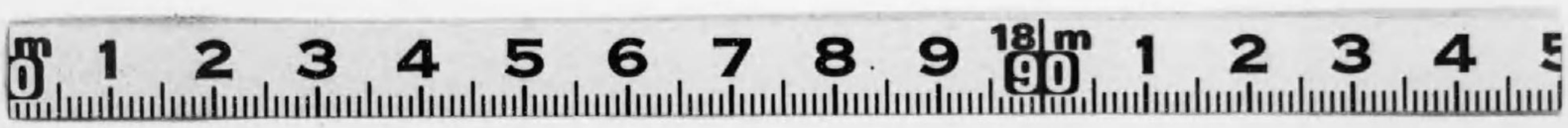

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 m 90 1 2 3 4 5

503
244

503-244

博義正 陽述

教誨

帝國興道會發行

大正
12. 5. 30
內交

せがれに嫁を迎える――かうなると立派な老境だと感じている
處へ、興道の日本社の田村君が――なんとその紀念に、創刊以
來掲載されたものを、新裝してまとめられたい、希望者もまん
ざらでないと、油をかけられたのがこれである、年次を追ふて
もなければ、類を集めたでもなく、唯あるがまゝに、所謂一山
百文の体裁――併し著者はどこにも、信仰の血は通ふている
の自信はある
挿入の寫眞は餘技になるもので、御愛敬に過ぎぬ、そして總て
は著者の考案のみであることも、申上ておく、製本屋へまわし
てから、誤植を多く發見したのは、怠慢の罪まぬがれない、初
ての仕事でまとまりはつかず、体裁はてけず、讀者の叱正は譽
期の上、時は大正十二年五月十日――事のあらましを記して、
讀者の諒解を乞ふ――著者――

風つきの磯

目次

後々にのこる行爲……一
覺醒の時代……四
萬相談所……一六
たすけ一條……二五
山田勇吉君……二八
害蟲を除きたい……三八
木曾路の旅……四二
上原會長十年祭に……四六
東京と教會……五一
所信を明らかにす……五六
上原會長十年祭に當りて……六二
噫脇坂先生……六五
いのりの聲……六九
彼は木偶か……七五
盡日尋春不見春……八〇
八埃をうたふ……八四
苦しい昔と樂しい今日……九四
行け!! 一直線……九九
冷藏庫……一〇八
浮き上つた喜び……一一〇
田中會長……一一六
東葛飾所長に呈す……一一八
時代を知れ……一二四
空頭錄……一二八
鉛刀一振……一三四
甘露の味……一三八
弔詞……一四三
川口行き……一四六
腐腸空頭……一四八
尾崎君に與ふ……一五一
仕事の樂……一五五
鄉土に歸れるを……一六五

須賀本德一郎君……一六八
伊勢崎の半日……一七二
松本しま子刀自……一七五
霞が浦と香取……一七八
斷腸の記……一八三
腐鵬空頭……一九一
土屋作太郎氏……一九三
覺醒せよ授訓者諸君……一九六
腐鵬空頭……二〇六
若き人身退りければ……二一一
閑談……二一三
擬高野夫婦來狀……二一八
江戸川清談……二二二
あわれ其子等……二二七
腐鵬空頭……二二八
故柴田先生……二三二
公開狀……二三七
木枯の夜……二四三
困難に打勝てよ……二四八
暗い影が我を追ふ……二五二
あなたの教會に……二五四
年の始……二五七
桃の唇……二六〇
不自由の身て……二六二
鉛刀一振……二六六
朝鮮宗教談……二七一
銀丁字の花……二七四
あたゝかき家庭……二七七
仕事……二九〇
呈今上支教會長……二九四
秋元先生……二九九
寸間講話……三〇二
當世誰が身の上……三〇四
趣味旅行……三〇七
一針……三二二
ありし日を……三二六
反省せよ……三二九
よしあし草……三三七
思ふまゝ……三三九
長命と慾……三四三
銷夏漫錄……三四八
川村辨左衛門氏を送る……三五五
さやけき影……三五七
うめ草……三六七
お蓮……三七〇
貧血充血……三七四
針の穴から……三七七
蟬なく庭より……三七九
明月夜話……三八三
不足は毒……三八七
涼風……三八九
アテナインキ……三九一
煤そふじ……三九四
偶感錄……四〇六
みなの母になれ……四〇八
授訓者講習……四二一
舊衣を脫して……四二四
うめ草……四二六
萬相談所……四二九
不屈不撓……四三八
プラトンの滴……四四三
銷夏漫錄……四四五
偶感……四四八
湖畔の夕……四四九
蘇生……四五一
講壇わすれな草……四六三
ふゆこだち……四六八
過去に生くる人……四七三
見えぬ力……四八二
天のあたへ……四八七
わがまゝにゆく……四九〇

寫眞目次

一　磯のまつばら　（興津海岸）
二　水のまにまに　（白子附近）
三　春のおさづれ　（興津附近）
四　雨あがり　（烏山附近）
五　こかげすゞしく
六　くさのいほり　（白子附近）
七　おちばのあと　（板橋附近）
八　いろさへ香さへ
九　かすむ松原　（興津附近）
十　夜の光　（上野博覽會）

『後々にのこる』行爲

○

五十年は苦しみの道を始終一貫せられた大教祖のお弟子達の現在はどんなものである其又お弟子達の又弟子たる人々はどうゆふお道の通り方をしているか

○

わたしは常に思ふているのは自分の日々にする仕事は善なり惡なりはさておいて後に傳へられるといふことである

○

十五日が十六日になつたからといふて十五日の仕事が消えてしまうものでない消滅しられてはわたしらの生命がないのだ

○

してみると日々にする事は『後に傳へられる』に定まつているそこにわたしのいひぶんが在るのだ

○

上々の方はさておいて所謂又弟子の方々が常に通られる道すじが一々後に傳へられてもどこに恥かしい處はないと確信しての通り方がどれほどあろふか

○

今わたしはその項目を上げて一々指摘はしないが大概自分の胸を考へると忽ち是非があきらかであろふ

○

わたしらは何をするにも後々の人がそのまゝ眞似しられてそれが世の爲人の爲になることをどれだけしているかにある

○

わたしらが唯一筋の通り易い道を敎へてもろふて通りにくい日があるのはその心が違つているからで道も敎へ方もちがうているのじやない

○

いかに澄んだ水でも泥を入れたら濁ごると敎へられてあるいくら結構な道でも心がちがうてはむだ道や恐ろしい日を見るのも止を得ないと思ふ

○

天下泰平では弱い武士がふへるのは昔にあつた事實だ道が盛大となると弱い會長弱い布敎師が多くなりはすまいか

○

わたしらの通る道はやがてあと〳〵の人等がそのまゝ通るとすれば大小をとはず道らしき心道らしき行爲をしなければならぬいひかへると明るい筋の立つたことをしておかなければなるまいと信ずる

覺醒の時代

四十年祭に就きましては人間はあれこれと眞心の限りを盡さしていたゞきたいと日夜努力いたしておりますが一方から申しますと御教祖の御神靈の思召はと思案さしていたゞくことも肝要のことであります

人間の爲の四十年祭でなくて御教祖様御神靈の御祭でありますから百般その思召に反くやうなことがあつてはなりますまい

その思召ともうすことは銘々の心のさとりでありますから私が申しますこともおよみくださる方の心とちがふた事もあろうとも存じますが卒直にのべさしていたゞきませう

信徒一般のおねがひ

私は信徒のおかたへのおねがひ致しますことは信徒の一致ともふすことでありま

す

今日の信徒はどうも一致の力がよわいと申されておりますそれがどふして弱いかといふ事が問題であります

それで私の思案する處によりますと家族的に一致していない事が最大原因であると斷じられます

素より信仰が自由であつて苟にも強いるのではありませんが家主が歸依する宗教にその家族が感化をうけないのは燈火細い爲に足元さへ照らすことがでけないと同じで家主の信仰がなまぬるいからであります

家主若くば主婦の方が一度此御教の御蔭を戴いて心魂に徹した喜ばしさは何物をも打碎く勢でありますそれを家内中が喜びを共にしたい同じ御蔭をいたゞかしたいの念が日を經るに隨ふて強まつてゆくべきでありますが事實は豫期の如くまゐらずして終には一名一人限りじやまあ自分だけでもといふ心になつていつしかそ

の勢もくだけて甚だしいのになると教會の名簿にのみ止まつた信徒になつてしもふて名實を異にするものと成り了ることになつております

私はそこに深く憂ひておるものであります

病氣で申すと醫師の斷つたものや家庭の不和や惡因緣や人世あらゆる苦痛を根底から救ふてやろふと大慈大悲の神樣にすがりながらその救ひの綱を不知〳〵はなしてしまふていつの世に眞に清い美くしい生活がさしていただけませう

神樣ははなさせぬやうと思召くださる救の綱を親の心を子は知らず明日のことも知らぬ身でありながら尙救ふていたゞかうとしないでおります

よく世間で申しますが神樣に見放されたといふがそれは神樣が放したのでなくて人間が神樣を見はなしたのであります

ひとたび此道にむすび付けてくだされた者は「早く助けを急ぐ」の最優者として御守護をくだされたのでありますその御恩もおなさけも打忘れていては求めて苦

痛に親しみたいと同じであります

われ〳〵があくせくと汗を流して働くのは何故でありませう所謂「らく」になりたいの願ひでありますそれゆへに物質の上に多大の努力をいたしまして富は數萬を蓄へ居宅は廣漠といたし日々に珍味佳肴の食膳としたしみて月雪花のたのしみを恣まゝにしておりますがそれが果して最後の「らく」でありませうか若し夫れ冬の夜永の床の內枕頭の孤燈に向ひますれば萬感交々起つて過去のとりちがひ扨ては親代々の因緣や可愛い子供の未來やを考へますと亂るゝ心はとめどなくその苦痛は到底物質を出にしても救ふことのでけぬことは忽ち感じられることであります

そのはづのことで大元であるその元々の神樣におすがりしてあらゆる苦しみからのがれさして戴く外はないのであります既に信徒になられた方はこゝまで御思案がついておりますれば「あともどる」「なまぬるい」の信仰をなさる道理はないと

存じます

「ざんげ」は神にちかづく道であります何事も深くざんげしておたすけを願ふに當時の心にかへつて洗ひかへた心たてかへた心になつて何も知らずにいる家族の人々に此道の尊とさ難有さを泌々と說いてきかして共々に厚い信者となつていただきたいと存じます昔は改式の爲に異敎者と爭論がでけたものです此頃は改式願ひのないのも喜ばしい事じやありません

大なる「かたまり」は小さなものが「かたまりたい」の精神から成るものであります家族の堅い〳〵信念の一致はやがて大なる「一致」を見るのであります

私はそこをかへす〴〵も信徒の方におねがひして天理敎徒團はかくの如きものとさしていたゝくのが敎祖樣への尊とい勤めであると信じます

役員覺醒のおねがひ

私は順序として信徒方へ一致の御願ひしまして進んでこんどは役員方の覺醒をお

ねがひいたします

一体役員となられてゐる方にもいろ〳〵とありますからひとくちに申しますのは恐れ入つた事でありますが區別が立てにくい爲に露骨にもふし上ます

役員になぜなつたの過去は玆にもふしません既に敎會の柱また重鎭として神樣の御用を勤める方として今日の役員方は何等の遺憾もなく全力を捧げて盡しておられますかと問を發しますと明らかに「然り」と答へられる方は幾人ありませうそれで多くの方は「全力」を捧げる覺悟はあります明らかに在りながら家内の不順序や生活の都合や中には臆病不安の人も小數ありもしませうがそれは問題外であります

要するに時節が來たらの一語につきるのであります

時節とは何時くるのでせう何處から尋ねてくるのでせう熟眠したものを誰れが起してくれるのでせう

時節を待つ人は大概「時節」が輕車を以て御迎えに來てくれると誤信しております

それならばこそ今年とすぎ來年とくらして「今に」を頼みとしておられます

「今に」何とした頼りない淋しいことばでせう人に孤兒といものがある若し文字にその類のものがありとすれば「今に」といふことが當はまると思ひますそれを言ふ本人は恰かも大覺悟であるつもりでせうが冷かに見れば思想上の孤兒であります

「しゆん」がおくれては何もならんの御神諭は毎々承はつておることであります

「しゆん」外れのものは直打がむりません

「今に」は正確に刻限に後れることでありませう

今や戰後精神界の動搖は骨頂に達し或は成金と稱し破産を悲しみ一喜一憂各其所を不得して「もみ」の袖口からも「木綿」社からも涙は同じやうに濕つて居るではありませんか

國民が其歸する處の定まらんといふことは然るべきことであります

此時に當つて教祖四十年祭の一大機運が到來しました苦しも皆さんが逃辯にあらざる「今に」を尊重なさるならばその「今に」は將に今日に在ます目前に逼つております

活動なさる時御奉公なさる時はそれこそ今である大童となつて奮闘の時期は今をおいて何時を求めませう

役員方の充實したる力は此時からその寶庫をひらいていたゞきたい老も若きも進んでください男も女も働らいていて下さい

一日千日の理といふのはこの事でありませう

私は切に献言して役員方——賢明なる役員方に覺醒を願ひたいと切望します

會長反省のおねがひ

私は終にこゝに進むの餘儀なき場合となりました不德の私か高德の會長所長の各位に反省を乞ふなどは盲蛇におじぬ所業でありませう勿論會長所長各位は蛇ではないが私は盲を以て甘んじませうお迫に暗い事理に暗いのであるから或はあき盲でせう暫く私のいふことを繰言として御賢覽ください

短刀直入に申しますれば今日の會長所長各位は「小さく」實がいつて固まつた形に見ますそれは盲の當てずつぽうと御用捨ください

なぜ痛言をいたしますか私の思ふ處によると或る會長は受持の教會に居すくまりて漸々のことにその教會を治めて餘力のない人がある

他から申すとそれで立派なやうに見えるが元來我教會はどこの枝なりやと考へると必ず幹の方から水氣の通ふお蔭で枝らしい枝そして花も實もその枝をかざるのである

我教會だけで親に——上級教會に勤め一條がでけぬやうでは即ち小さく實が入

つた形としか言ひやうがない

それは或は私の惡口かも知れない會長各位は寧ろ御遠慮の上から自分のやうな者が「でしやばる」のは能くないの御謙遜でありませうがそれこそ不用の心遣ひと申しませう

時代を見ましてもどの教會も人を急に求めています

受持の教會は相當な代理者に一任して一つにはその人に實地經驗を與へ一つには上級へ御奉公することが當を得たことであつて初て未來に大なる影を認めることになると存じます

私の餘分の申譯ながら會長所長各位の内で受持の教會が兎角發展の途に就かぬと自覺なさる方はそれこそ「恥」も外聞もかへりみず親教會へ願ふて早々整理して戴いて結構な教會にしてもらう事が急務でありますそして完成の上は前述の如くに御自分も親教會へ御奉公をしていたゞきたい

私はあら〳〵愚見を述べる自由をお與へくださつた事を謝します
信徒の一致や役員の覺醒や會長の反省はなんでこんな愚策でたりませうそれは私
自身の筆が自由を缺いておるからです
要は教會の完成――個人の完成にあります
そして此時期にこれを述べさしていたゞく事は偶然でないことを御承知願つてお
きたいと存じます
掛値よりは正札ですいつはりのある外交は捨りました今日益々内容充實を尊びま
す立派な着物それが何でせう黄金の時計それが何でせう
私は去暮に「めくり暦」を書肆の店頭に求めまして甲は六十錢乙は三十錢といふ
番頭の説明をきいて三十錢より六十錢の方が日數が多ければ買ほうと呵々大笑し
ました私は實利主義を申すのではないのです
道をおもふものは我身の「なりかざり」を思ふいとまのない事がよい事に思ひま

す
かうして精神上に清い美しい館を立てることが最大急務と思ふ
教祖様も必ずお喜びくださるのは私の辭をまちませぬ
どうぞそのおつもりでお働きを願ひたいと存じます
信徒役員會長の方々の既に御覺悟のあるのをも知らずこんなお願ひするのもあま
り向ふ不見とお叱りくださいませうです私はどこまでも盲であります私をし
て盲たらしめ給はゞ況に私一人の喜びならんやと此一句をもちまして降壇さして
戴きませう

○信陽の講習によめる
ひとすじに習ふもうれしい人皆の
心に咲かむ花のいろ〳〵

萬相談所

畔人あれこれと多忙で久しく相談所を〆切ておいたがなんでも再開せよと嚴しい御催促に根がお人喜の畔人それほどの御願ならと「うぬぼれ」を杖について破門を左右にあけると第一番に御入來になつたのが田村義雄さんであつた。

實は今日來たのは外ではないが此頃毎日〳〵連ばしてもろうている家があつてそこの主人が肺病なんだあびるほど呑む藥もあまり効能はみへず轉地だ温泉だと親族をさはぐかとても一人でゆけるものでもなし二人は附添ひがなければならぬのでそれも實行が出來ずあれこれしている間に一寸にほひがかゝつて私が運ばせて戴いてゐるが今日で十日あまり頓と御守護が見へない先もきのどく自分もきまりがわるいがそんな事にめげず休みなく通ふているが今日はぜひそのおさとしを伺ひたく夜のあけないうちから門の外に立つていましたどうぞよろしくねがひます

おゝそれは〳〵御苦勞樣いつもながら御熱心には畔人つくづく恐れいる何も知らない畔人ではあるが心の限御相談するといたそう

「いくらさとせどもわかりがたない」といふ御言葉を御思案なさいそんなわずらひの方は割合に賢そうな人で氣がついて先を見越して案じて計りいるそれであるからこちらのお話を眞面目に聞してもらふともせずに我の思ふていることを心の中に照らしあはしてをきながらそれはいゝと一々判斷する心がある我が助けて頂かうといふ信仰を求むるのでなくて善惡を區別するやうな冷い心である。

それであるからさとしても〳〵わかりがたないとの御ことばから考へさしてもろふてもこちらでいふことがわからんのでなくて心におさまりにくいのであるそれは「かうまん」ともふしておれが〳〵の自我心が強くゐる處からおこると存ずる一體肺病は世間では遺傳ともいふているお道では「いんねん」病であつて容易に

助かる身上でないそれは惱みが重いのでなくて今云ふたその人心がわかりがたない爲にそうなるのである。

そんならと云ふてさような心遣わずに御話をおきゝなさいと頭からいひ渡すのは間違ふているからそこはこちらの眞實をうつさしていたゞくより外にみちがない口でたすかるのでなくて心でたすける神がおはたらきくださるのであるからわからん人やむづかしい人やと思はずおなじ兄弟に生れて身もやみ心もやみていながら「こうまん」心がつよいのでそのわづろうてゐるといふことがわからず返つて自分をゑらいものゝように思ひちがひしている處をこちらは眞から氣の毒な方やかはいさうな人やとの眞實の心で眞實の御話を取次ぎさせていたゞきなさい先の人が眞から聞くようになつたら又おいでなさい畔人の心得てゐるだけはお取次することにしよう

……

なにもう御歸りかお茶もあけず頓と失禮それでは力いつぱい眞實ひとすじに御賴みもうすぞおゝ足の速い人じやもう影も見えぬ……

おまちどうであつた次の方はこちらへおとうりくださいおゝあなたは大野六藏さんの御用のすじをうけたまはりませう

……

エー先生餘程春めいて參りました今日御内談に上りましたのは實は私の方の所長さんの事でありまして實際困つております御存じの通り四十年祭と申して心のある人もない人も一生懸命になつて奔走してゐなさる最中にまあどうでございませう毎日〳〵青い顔して腕を組んで思案ばかりしておられます

役にも立ちませんが役員が代る〳〵伺ひましてどうか何なりと御聞せ下さいましたら足ぬながらも御相談させていたゞきますからとそれは〳〵日々おなじことを繰かへしても何とも申されません有がたう〳〵とかう云はれるだけでこんなこと

では刻限にもおくれますどうか先生にそのおさとしを、伺ひたいと今日お伺ひいたしましたどうかよろしく願ひます

……

畔人心にもない大聲をあげて驚かしましたそして後に來た人はお斷りして門をしめました

……

電車の走る音はだん〳〵強く聞えて上野では十一時を打つ鐘がきこえます

すると靜に門をたゝく音がしました今頃畔人に用のある人もゐまい聞ちがひかと氣を鎮めるとどうもちがひなさそうなので返事をしながら立つて行きますとそれは朝の内に見えた人で畔人が大聲あげた人でした

さすがきまりもよくないが素より心あつてやつた仕事であるから今夜來たのは善か惡かと樂みながら通しました

……

火鉢には火がない失禮ながらマッチを出して喫煙する始末

……

やがてその人の語り出す一條は今朝は長話を致しまして飛んだ失禮いたしました

私はこちらへ上るまで唯所長に困るこまると云ふだけしか思へなかつたのはあまり粗忽なやり方でした

我が心に眞實があるかのおしかりから段々ざんげさせて頂きますと止め度もないほどざんげがあります

所長さんの日々考へていられたのも初めてわかりました自分は一かど人間のやうに思ふてゐましたのは井の中の蛙でさすが所長さんは諸々方々を見ててくださいますから力のある役員か書にかいた役員か位は早くから判つておつたのでせうあまり我々が日頃「我が」強いため仕込んでくださるお心があつてあれこれと教へてくだされてもその心を改めてもらをかとばかり思ひましたので在りのまゝを先生に御相談いたしておさとしを御願ひいたしましたが意外にも御立腹で實は宙

を飛んで逃げて歸りましたが一寸一言のおさとしが氣にかゝりまして食事もせず思案いたしておりましたが不圖心付きましたのは人が惡い殊に親としてある所長がわるいそれをあらためさしたい青い顔の思案がなにになる困つた事じやと思ひこんだのが心の誤りでありました

所長はどうして考へてばかりゐて一向に困つた事じやときめてこちらで受付けなかつたのです

いくら強そうな加藤清正でも書にかいた清正では一雨で破れます

全く我々が間違つておりましたと心付きますのと待てしばしなく宣教所へ飛んで行きまして所長の前で泣いて今迄のおわびしました

それまでにがりきつた所長さんは俄かに笑顔になつてくださいましてさあ二人で神様に教祖様に御禮を申上げまして元の室へかへりますと所長さんはこれで晴みから明るみへ出さしていたゞきたいあなたの心一つで外の役員さんは皆目をさま

せてくださるこんなうれしい事はない

こんな小さな宣教所でも心力一ぱいの御用をつとめられるうれしいうれしいとそれはそれは勇んでくださいました

……

こんな次第でありますから今朝申上げた事は取消していたゞきたいと存じまして夜中も無遠慮に伺がひました

……

さうありたいさうありたい畔人もまんざら狂人じやないから大聲あげて喜ぶといふのでない今朝のあなたの御話が親のわるくちばかりいふてちつとも自分のとゞかない事をいふていないそれだから氣附けに一寸驚かせましたまでの事わるく思ふてくださるな

……

もう時計が二時をうつた夜とともにお道のけつかうを語りあかしませう春といふても夜更けは寒いこんな毛布など脊にかけてくださいお互に語り合ているとさむさも空腹も感じませんおゝ鳥のなき聲あれは一番鳥でせういゝ夜るでしたね

醫師と患者

醫、身體に大して惡い處もない樣ですが精神に苦痛でもありませんか

患、御察の通りです

醫、遠慮は御無用御洩しなさいきつと療して上げます

患、それでは心配事でも全快しますか

醫、御念には及びません

患、やれ〳〵安心し、實は診察料と藥價の心配です

助一條は神に仕へる道

はたらきも何のことやと思ふている世界中は神のからだやとは御教祖の御歌であることは御一同の御承知のことであります

大天地小天地と申しまして世界と人間の體とは同じであるとも申されまして人間は月日のかりものであります

偉大なるこの御守護をうけます懷に住み月日は人間に入込んでいると仰せられました如くぬくみ水氣はそのおはたらきに依り人間はなにをさておいても御神恩に酬ひ奉らなければならぬことは既に悟得しておりますから日々に身の毒心の毒になる八埃を行はぬやう萬づ眞心一筋に國の爲め道の爲め御奔走してくだされてあるのです

してみますと人間はどうでも眞より外に通る道はないその眞の道は神樣よりお與

へくだされたもので

神はつきやいよいものや人間ほど

つきやいにくいものはない

とお聞かせくださる通り人間の心はむつかしいもので川中に立てるが人中に立てぬと申しまして人の心ほどわかりにくいむづかしいものはないが神様に仕へるのは眞一すじになればきつと間違のない事である

川に添ふてくだれば海へ行くと申し西洋ではどの道も羅馬に通ずと申して道さへ歩めば此人間に罪や埃がある道理がない親は子が可愛にちがいない神様は人間がかあい一條の處から萬事萬端の御恵をくださることを深く心におさめて通る道を誤らぬやうにしなければなりませんその心でなにかと人の爲めになることに盡さなければなりませんそのたすけさして戴く人といふのが我々と兄弟で同じく神様の可愛がつてくださるのでありますから人さへ助けてゆけばそれが直ちに神様に

仕へ奉る道で恩酬じの萬一にもなるのであります休みなくゆるみなくどうぞ飢奔走を願ひます

哀れなる説教

説教使が哀れな説教とのぞまれて石童丸は高野山と因縁話をやつたすると聽衆は皆寢てしもふた中に一人ハンカチで屢々目をふく老母がありまあ一人でも感心だゝ説教使はどこが悲しかつたと聞くと老母は何にも悲しいことはございませんせん流行眼でくしゃ〳〵しますのてふいておりす

山田勇吉君

（一）

先生様それではこれが御別れでございますか
どうか御都合がついたら是非來てくださいまし私は先生様よりたよりにする人は
ないのですから忘れぬやうに屹度布教においでくださいお願ひで御座いますよ
かく語るは五十格好の婦人で髪は結んだまゝ手織木綿の單物に風呂敷包を携へて
いんぎんに別れを惜んで居る
長い間おせわになりまして私もこゝが因縁ある處と存じまして熱心に布教さして
もらいたいと念じて居ましたが親教會に御用が出來てどうでも歸らしてもらう事
になりました
御話はいたしにくいが此度の御用はもう二度此地へはこられないらしい

それを思ふと殘念でたまりませんが親教會の命にそむくこともでけませんそれで
はお別れにいたします私が國へ歸つてもあなたが一心に布教してくだされば神様
の御働らきにかわりはない
又だれか來られるものがあつたらよこしますが他人を目的にせず自分のせいしん
で確固やつてください
かういふて居るのは小倉袴に數寄屋の縞羽織旅支度した三十才位の人である
北海に添ふた小さな港の町はづれ昔を語る松並木の根に暫し腰をやすめての別れ
の辭いくらくりかやしてもきりがない
それではお別れしますどうか御機嫌よろしくと互にかはして木蔭に姿の見えなく
なるまで見送つていた女は進まぬ足に家路にとついた
先生はあゝ仰しやる自分の心でしつかりやれ——なんで私のやうなものが人助け
がでけやうかあゝこれで御信仰もお休みだ今迄でけた講社もつぶれてしまうし

又元の商内でもして暮してゆかう
これほど思ふてゐる御信心神様もあんまり聞えぬ折角布教人が來てくだされてあるのに親教會へ引上げるとは何といふなされ方こんな事では御道もあてにならぬ人困らしといふものまあまあ寄らずさわらずにやる外はないと落膽してしまうたそれは川島きみといふて土地では相當に暮して居た者の今は裏店におちぶれて小商内にその日ぐらし
それでも御教理をきいて大熱心その人をたよりとして親教會から廻したのが吉原柳助といふ青年上りの人である

（二）

油照りであつい日で風は死んで木の葉つ一うごかぬこういふ日は大氣がかわりやすい果然午後から大雷雨で港の人々は縮み上つて皆家へ逃げこんだあれやこれやの思案最中に雷雨なのでお君も驚きはしたものゝ根が熱心な信者あたりが暗いので神様へ御燈明を上げて快晴を祈つてゐた家の前は川のやうに水はあふれて流れとなりものすごいやうである
お君は不圖腹痛を感じた大方ねびへしたのか位に思ふてゐたが痛は染々とこゝろがつてもふ床につく外なかつた
若い夫婦達は外出してゐないのでようようはひづりながら床をとつてみたが苦しさが一通りでない外には雷鳴で車軸をながす雨、内では苦痛に凌ぎきれぬ身上折も折とて人をよぶ事もでけずお君は一人家内をのたうちまわつたちようど夫婦も戻つてくれたので押すやら撫でるやらその結果すこしは落付き加減に見えた
その時お君はひどく感じたことがあつた
我身に有難い御助けをいたゞいて親教會から布教人までもきてもらつてお道に奔走する決心したものがたとへ布教人が歸國したとはいへ神様にあいそづかし親教

會への恨みをつく〴〵と惡い心づかいと氣付いた
賤やしい我身のやふな者も神樣の御手引で身上からだん〴〵御教理をきかしても
らい此土地の草びらの思召であらせられたであらう
それを些少のことから心を倒すのは御神慮にかなはぬことゝ深く「さんげ」のせ
へしんとなつた
早速御神前に進んで若い夫婦達と共々心の迷ひを謝し再び元の心に立かへつて苦
勞困難をいとはず神樣の御用さしていただきたいの定めた心を捧げて祈つた

（三二）

雷鳴は遠い山の方へ雨は上がつて蒸暑い夕暮となつた
お君はその苦痛から奇麗に救はれて今更神意の畏こい事を思はずにいられなかつ
た
翌日から多くもないが講社廻りをはじめて見變すばかりの丹誠をするやうになつ

たそして如何にもすが〴〵しい心で奔走がでけた
港から一里ほどの山に近い處に須原村といふのがあつてそこの農家で金田藤助と
いふのが毎月日をきめて講話する家と定めてあつた
今日はそのつとめ日とてお君は朝から甲斐〴〵しく支度して留守のことなど若夫
婦にいひつけて松原から畑道小川の橋をわたつてもう見える森それが金田の住居
であつた
日の暮頃から十四五人集まつて來た
眼のわる人足のなやむ人懷妊者さては嫁いびりの老母までも來ていた
御話が初まります皆樣あちらへと家主の藤助がいひ渡すと一同はおありがとう御
座いますと奥の座敷に集まるのである
床の間に神床を設けてお君は正面にそれでもけふは一寸した羽織をきてゐた
今日は人間身上はたてながしのやかたといふ理をおはなしいたしますとお君は汗

を流して說いてゐた

（四）

お話のなかば頃四十格好のあまり村では見かけぬ人が今日は天理敎のおはなしがあるといふのでまゐりました私もいつも胸のいたみがあるので困つてゐるどうか助けてもらいたいとの事であつた

氣のいい藤助は大喜びそれはよく參りました今御話のさいちうです早くきて御聽きなさいと奥へ誘ふた

ぎよろりとした目付で今來た男は何物をものがすまじと見渡してゐた

一同は夜の十時といふに各喜んで家路についた途中から來た男もそれに交せつて歸つていつたお茶がはいりましたといふので十二時頃まで語り合ふて神床の前にお君は安眠した

翌日朝凉にと朝飯もたべずお君は我家へ歸つたそしてその夜は自宅でのお話日で

ある

六疊に四疊半の二間がかれの住居である今日は鰈がとれたので神樣へ上げて下さいと漁師の一人が小鰈をさげて來たのが初りで二十人計り暑いことなどは氣にもかけず信者が集まつて來た

例の須原の藤助も早くからあれこれと立働らきしてゐた

すると昨夜の男——ふしんな男が又しても來た氣のいゝ藤助もこれはおかしいと思ひ初めたが別段何もせずおとなしく御話をきいて歸るのである

お君と藤助とは此男に注意し始めた

けれどその理由がわからなかつたすると或る日の午後港の町の御助け先でお君がお話中に不圖その男の顏が見えたがいつか何處かへいつた

ます〳〵おかしな人だとお君はおもふたが此方に何のわだかまりもないので深くも氣に止めずにゐるとその次の月の集り日にその男は他の人より早く來たそして

名刺を出したのを見ると○○署刑事山田勇吉とあつた

（五）

お君は來意をとふたすると山田と名乗る男は先づ神様にしばらく拜をしてさてお君に向つていふには

私は二三ヶ月前から擧動不審であなたを特に注意する事になつた須原村まで出張したりお助け先までも手を廻してどうか種を上げたいと苦心したそれで緊要な種が一つもなくてその度毎に聽かされる御話が一つ二つ胸に殘つて果ては自分の勤めがあさましく成つた人の惡事をそれからそれへと探つたのは惡人をこらしめる爲であるがそれが日頃の習慣となつて人さへ見れば惡人のやうに思ふてこれ迄どれほど罪をつくつてゐるかわからんさう思ふと矢も楯もたまらず私は役所に辭職を出して來ました

今だから云ひますが私は捕縄をふところでいざつて今夜はしばらうかといくど

覺悟したかそれも聽いた御話に感じて何もわるい事をしない人よしんば教導職がなからうと人助けする人そんな人を縄にかけてはと思ひかやしたことは幾度か知れません

もう私は無垢の人間になつたつもりです罪造りの私のやうなものでもお弟子にしてください

眞心こめた詞にお君は夢中で聽いて居りましたがその誠意に感じて夫はよう心定めがでけました元々何もしらぬ私どうか御手傳ひくださいまし共々御道を働かしていたゞきませうとその夜はことさらに陽氣な集り日であることを感じた

（六）

それから數年の後自分はその刑事たりし人に逢ふた初對面に渡された名刺

天理教○○宣教所長
山田勇吉

完

害蟲を除きたいとのおたづねに

○

尊書辱く拝見いたしました毎年田畑作物雜草にまでも害蟲發生人體に恐るべき害毒をあたへるとのこと嘸かしお困りと存じます

それで大神樣に祈りを上げて精神の改良してその害を除きたいとの御一念まことにごもつともに思ひます從來きかしてもろふていることをお話さしていたゞきませう

○

お道は御承知の通り心一つでありまして助かるも助からぬもその心定め次第であります又大神樣は人間身の内の御守護ばかりでありませんから萬の御守護くださることはもふすまでも在りません

そこで思案をいたしますと蟲といふものは素より奇麗にしてある處にはわかぬものの又住まぬものでありまして何れゴミ臭い處にわくものとしますれば一人限一軒限りの理でそのきたない心のそうじをする事が肝要であります

○

御手紙によると慾の心がきたないから「ざんげ」もしたとの事ですが至極御尤な事でありますけれど誰れでも害のある蟲であれば先づあなたの家内中が一致した人を助ける心となつて「やさしい」親切なこゝろを確と定めそれを行ひめへ〳〵はだ〳〵の心もたず一家はいつも「やうき」いさみのせへしんで篤く神樣を祈ることが大切であると思ひます

○

無理な願ひはしてくれるなとは御神樂歌にある通りで難儀なことを御救ひをいたゞくには願ふ人もその心を堅く〳〵定めて大神樣がその心ならとおうけとりくだ

露光量違いの為重複撮影

さるまでの行ひが必要であります
助けてもらふ時だけ熱心してあとは又心に草をはやすやうな行ひでは天は見とふしでありますからお助けないことは能く御存じの通であります

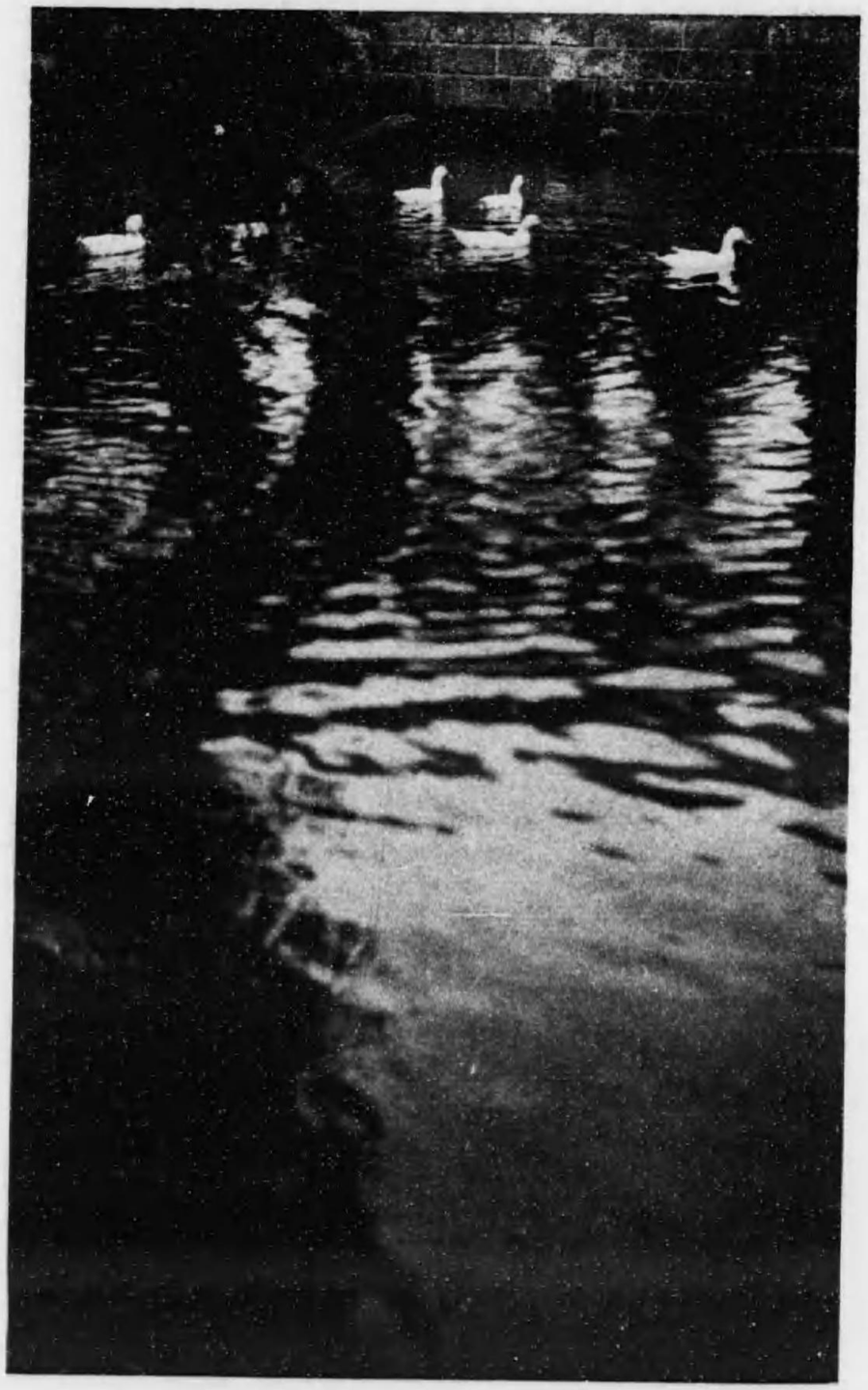
○

御信心は永久のもので一時的のものでない「苦しい時の神頼み」は人間の不眞面目を露骨にいひ現はした言葉であります
あなたも身の内借り物八つの埃は餘程おきゝ及びになつているような御文面ですから詳しい事は述べませんが篤と御思案を願ひたいと思ひます

○

或る意味から申しますれば田畑も家もその主人の體の延長したものでありますから田や畑に蟲がいるとおもわず我からだにわいているといふ精神で油斷せず直ちに「ざんげ」して御すがりになることを切におすゝめ致します

露光量違いの為重複撮影



水のまにまに

さるまでの行ひが必要であります

助けてもらふ時だけ熱心してあとは又心に草をはやすやうな行ひでは天は見とふしでありますからお助けないことは能く御存じの通であります

○

御信心は永久のもので一時的のものでない「苦しい時の神頼み」は人間の不眞面目を露骨にいひ現はした言葉であります

あなたも身の内借り物八つの埃は餘程おきゝ及びになつているような御文面ですから詳しい事は述べませんが篤と御思案を願ひたいと思ひます

○

或る意味から申しますれば田畑も家もその主人の體の延長したものであります

ら田や畑に蟲がいるとおもわず我からだにわいているといふ精神で油斷せず直ちに「ざんげ」して御すがりになることを切におすゝめ致します

○

「ざんげ」した眞の心になつたら神様へ清水を供へ一生懸命に御願ひして家内中一致してその清水を害蟲のある處へ榊葉でふりかけておまわりなさい

しかし清水をいくら振りかけてもあなた方の心定めがないと御守護はいたゞけませんから申添へておきます

○

初め通信でさとしてくれとの御希望ですがこんな大事なことはとても筆がまわるものでないと存じまして教師を出張さしませうと申上げましたら都合があるから是非通信にとの強いての御手紙でしたから認めて差上げますいづれおわかりにくいでせうが御思案を深くおねがひいたします

木曾路の旅

○御本部の婦人會も濟んで四月二十九日朝の六時二十分丹波市發車で奈良迄は非常の混雜であつた足立の參宮團なども見受けた丹波市から名古屋篠の井經由で上野驛迄六圓二十二錢

○奈良から名古屋まで馴染深い地で別に書くこともない曇天に金の鯱を見てかけ出しの田舍漢も名古屋とうなづかれる

○東京行の各等連絡の直行列車を見送つてあれに乘ると今夜の十時四十分に新橋に着くのだと殘りおしげに見送つて長野行と札下げた客車の人となつた

○改良の聲はどこにもあつて眞に改良したものが少ないここも御多分にもれぬのか名古屋の上辨ときたら御話にならぬ粗末な品物價下落して辨當向上すとでもいふのか苦々しいことだ

○かなりの客があつて十二時五分發車した千種は飯田町に於ける新宿といふ格で木曾方面はこゝから乘るものが多い名古屋の一端である

○大曾根勝川多治見あたりまでは尾濃の平野であるがそこから高原になるので信州松本まで三十六のトンネルを數へても知られる

○土岐津驛の傍に競馬會があるので下車客が多く漸く足腰をのばせた釜戸といふ處は石材の多い處と見えて驛の附近に山成した石なども燈籠に手洗に加工したものもあつた

○大井坂本も過ぎて中津川は山間の都會

○坂下あたりから有名の木曾川の激流それが潭となり淵となり瀨となりて車窓のながめは又特別

○木曾の旅は此川あればこそといへる三留野野尻をあとに須原驛そこから更に活月する要がある

○須原の町は木曾川に添ふて居る板屋根に丸石で風を凌ぐ全町みなそれである町の中を小川が流れて柳の糸もゆるやかに昔振を語つているようである

○トンネルを出ればそこが寢覺の床である流の行詰る處深淵を爲して水淀み大岩小岩のいづれもが「カンナ」掛けたやうに平面で中央の大岩に辨財天を祭る

○昔し浦島が龍宮から歸つて茲に目覺めたのでこの名がある淵の底に龍宮がある と傳説はこう敎へて居る

○上松から少し來た處そこが木曾の棧橋であるが注目しないと見外らしてしもう

○木曾福島驛へついたのが五時三十一分ホームにそばを賣る試みると一杯八錢まづいものであるお六櫛は此邊での名物驛賣のはそうでないが安いのには驚いたすしは買つたがとても食ひ物にならぬ

○實に名古屋を離れて松本まではとても東海道の比でない後に旅する人は辨當持參を勸告する

○木曾福島は木曾川にまたがつた都會で折しも櫻花爛漫である都の花に緣遠い私等は木曾へ來て花見するのも一興である

ゆく春をおしむや木曾のさくら花
ながるゝ空にほとゝぎすなく

これは實景である

○藪原に來る茲は海拔三千二百尺とは隨分高い處であると思ふた日はくれるさみしい町をながめて薄暗い電燈にうらさみしい生活する人々の如何に心細くやあると同情して鹽尻から逆行

○松本へ來たのは八時十五分出迎の好意ある諸氏に導かれて買切りの自働車は狹い松本の繁華な町を飛ばして十五分間に淺間の温泉は梅の湯の靈泉に心ゆく計り旅のちりを洗ふ身となつた

初代上原會長十年祭追弔之歌

とよだの山に吹く風の
松にしらぶる琴の音や
おろがむ袖もしめやかに
きこゆるかねも靜なり

しのべはかへるむかしとか
いざことゝはむ亡き人の
その面影の慕はれて
歩めばこぼる露の玉

草刈笛のひゞきをも
御聲とまよふかなしさや
野こえ山こえ里こえて
苔路ぞ霜に冴にけり

春のかすみや秋の雨
とはにまみゆる時もなし
月は照せどかくれ世に
さかりし靈の影遠し

あるも甲斐なき世の中は
ふちせ定めぬ飛鳥川

ながるゝ水のよどみなく
早くも十年かさねけり

鳥はなくなり清き音に
花は咲きけり香も高く
こゝろをこめし御祭を
樂しとこそはみそなはせ

或る人のものせし歌を乞ひ得て茲にかゝぐ作者は宣傳歌にもとの心ありげなれどいたらぬ節もみゆれば大方の敎をうけてきづなき玉となさばやとは編者の心なりかし

盡せ……雄々しくつくせ
進め……正しくすゝめ

世道人心地におちて
五倫道德たのみなし
祈れや神の恩寵を
すがれや天理の御敎を

盡せ……雄々しくつくせ
進め……正しくすゝめ

世界は神のふところよ
我等は神の子供なり
我等は神の使せむ
救ふは神の心なる

盡せ……雄々しくつくせ
進め……正しくすゝめ

斷崖絶壁深くとも
逆巻浪は高くとも
辛苦に倒るな道の爲
難しのぐぞ力なる
盡せ……雄々しくつくせ
進め……正しくすゝめ
身はこれ神のかしものぞ
心は神のわけみたま
成して成らざる事やある
至誠をこらせたゆみなく
盡せ……雄々しくつくせ
進め……正しくすゝめ

東京と教會

○

大阪市は教祖御存生中からのことで根底も深いし又教祖御自身で大阪へは御出張になつて神様の御自由用もおしめしくだされてあるから明治十八年に漸く天理王之命と神命を稱へ始めた東京とは格段の違である

○

けれど東京市も目下は百以上の教會が存在するやうになつた一寸聞くと市内に百ケ所もあつては驚いて退歩する人もあらふが帝都三百萬の人口そして十五區を始めて六郡に接續した町村からいふとまだ〳〵教會設置の要を見る試みに區別にするとこんなものだ

○

本所區の十八ヶ所を首として下谷十一深川十一淺草十神田九小石川の六ヶ所本郷五牛込五麻布五……四谷五芝五京橋五麴町三などから赤坂の一ヶ所は不思議な位である

○

大正六年末の調べによると東京市の戸數は六十二萬〇〇七十六戸とある今戸數に對して教會數と對照するとこんな表がでけあがる

區別	戸數	教會
麴町	一三九五二	三
神田	四八四四七	九
日本橋	二二四八九	四
京橋	四九五六二	五
麻布	二七七七七	四
芝	四九六一四	五
四谷	一六七七五	五
赤坂	一五五九〇	一
牛込	四六一六九	五
小石川	四八一七三	六
本郷	三五七八一	五
下谷	五七七五〇	一一
淺草	七七一三五	一〇
本所	六二一二六	一八
深川	四八七三六	一一
計	六二〇〇七六	計一〇二

○

即ち六千戸に對して教會一ケ所の割を示しているが更に各區に就いて見ると本所區は三千四百五十戸に教會一ケ所を有しているが赤坂區に至つては全區に一ケ所であるから一萬五千五百九十戸に一ケ所である

○

何故にかく不平均の表が出來上るか赤坂は交通の比較的不便や商業の不振や官吏など多いからか役所向の建物や廣い墓地などの關係か本所は地域も廣く地方からも來たものは先づ本所に居を占め漸次他の區に移るを例として所謂住易い地である隨つて谷底の人が多い故か地價が安いからと色々な考へが越らぬでもないがそれは皆空想である

○

その空想の證據はかうである赤坂にあるもの必ずその區に多數の信者があるのでなく本郷にあつて深川に有力な信徒をもつているのもある日本橋に教會を設置するに下谷や京橋に居住する信徒惣代さへある

○

かう考へるととても眞實な表はでけない信徒の所在地を精査して初めて確乎たるものが成るのであるが今はほんの現れた事實だけで時機をまつて發表することにしやう（現在の教會數は大正九年東京教務支廳の臺帳に依る）

所信を明らかにす

あれは十二月の三日であつた
寒い雨が風さへそふて降る中を牛重支教會の盛典に列して久々に開講式らしい氣分で歸つたのが夜の八時
翌日は二三の訪問客に按して正午これから千山の大祭にと思ふて中飯を初めたがどうも食へそうにない
頭はいたむ寒む氣もする俄に代人を出して蒲團をかぶると四十度の高熱
水よ氷よとさわいでくれるがさても苦痛はとれさうにない
夜に入つて醫師は來て流行性感冒と名付けて歸つた
六日も七日も三十八度くずゆやおもゆの少量は能く私の體軀をさゝへてくれないが僅かの内にげつそりと瘠かみへて來た

けれど八日になつて幸ひと熱は平生に下つた粥や刺身が飛び込むうまさで胃へと急いだ
その前日あたりから耳たぶが厚くなつたけれどさまでと心にかけなかつたのか此日いちじるしく厚くなつて顔から目鼻のまわりまではれだした
これは丹毒だと醫師も驚いた私も驚かずにいられぬ前門虎を防いで後門狼の類だ
漸く四日間の後食から救はれて更に新らしき丹毒とは氣が氣じやない
あれだこれだと手當やする見舞客も私の醜い顔に皆あきれていたであらう
丹毒は概ね四十度近い熱が伴ふのが常であるけれど私しは少しも熱のないので大助かりであつた
日ならず全治すると安心はしていたがいつの時かと不安がともなわないでもない
十二日には腫れもひき新舊の皮の交代が盛んで枕頭雪をなしていた
すると耳の下に少しの腫れもの格別氣にもとめないものが急に增大してきた

耳下腺炎だとのことでこれはとうとう十六日外科臺上の人とならざるを得なかつた

僅々半月に感冒から丹毒丹毒から耳下腺炎かさねがさねの苦しみに我ながら迷はざるを得なくなつた

けれど私は此の身上の爲に或る偉大なる福音に接したそれは人々のいふ月並のものでないことを斷つておく

一月も二月も三月も四月も祭事やらその準備やらで私の決意は實行でけない

五月あたりからは務めることがでけやうしかもそれがいちじるしく人の目を驚かすものでない寧ろ人は知らないであらうその知られない處に於て私は

過去の私と離れて新しい私を建てゝみたい

それは希望でなくざんげである

大空の一塵素より私の一擧一動は何等關することはあるまい

その有無は私の關せぬことで私は新らしい私をつくるに於て全力を集注する

私は職務や階級やそれを慕はしいものとせないけれど今新しい私を建設するに在ても邪魔にならぬから總てを有形のまゝでやらうと思ふ

私の三十年は大神より恩惠をむさぼつたに過ぎなかつたらう所謂恩に恩を重ねたのであらう

日頃私に對して親切の限りを盡してくれる人は五十四になつてまで新らしい自分を見附だすに及ぶまいよしやその希望があつても日暮れて道遠しでとても目的を達するものでない

それよりも飛ばず鳴かずおとなしくしている方が得策であらうと忠告してくれる

そしてそれは私の此度の思案の前半と同じであつたことを謝した

けれど私は賢い世渡りや上手なお勤振りやは私にして餘り不手際であることを自覺する

豚はいくど生れても豚である私がいくら化粧しても少しも美を增すものでない天來の豚は豚として生活するのが幸福の第一である去來猪たらんとした又猪らしい眞似も皆虛僞であつたであらう

さうだ猪たらず豚たらぬ今の私を純乎たる眞の豚に歸ることを得せしむるものは神あるのみ嗟呼唯神あるのみ

神經過敏な世の中に無神經の豚も對照として妙ならん否寧ろ眞面目でよからう殘物の何物を食しても强健なる豚の胃は克く消化する如くあらゆる事物を完全に消化したい一坪の泥濘は彼の玉樓である

私の求むる新らしい私は形式に於て何等認められる處のないまで同一型である

そしてそれは年來の上からかくする事の餘義なきことを斷つておくけれど形式はさうあつても質の上に於てたしかに新しいものを必ずもとめることができる

名を賣らん爲や奇を好む爲でもない斯くして私は慕はしい故鄕に歸ることができる

藁に生れた私は藁が故鄕であるそこが安全鄕である仕事場であるそしてそれが私の王國である

偶感

○
おこたらず勤むる身こそ嬉しけれ神の心
にちかづくおもへば

○
ふたつなき命をさゝげ道の物つくすぞ人
のまことなりける

○
ゆめさめてさやけき空に澄む月の照らす
光に道や歩まむ

故上原會長十年靈祭に當りて

神靈を崇むることゝなつて十年まことに昨日の心地がいたします
移りゆく世の中の暫しも止まらぬことは承知していながら此の十年を私はさて何をしてくらしたと顧りみますと寒い冬に尙汗をいたします
南の端の座敷に北枕におねかし申し上げて早此の世の方でないその枕頭に涙のかぎりをきこえ上げました暫の間とは申せ御心に叶ふひとつだに仕遂げませんでおめ〳〵と十年の御靈前に奉仕する心の苦しさわ拙なき筆で書きつくせませうか
偉大なるあなたのあとをうけてそれは太陽の前の一本燈心の明るさのやうな私が
辛くも東大敎會の御門の開閉と朝夕の神勤たゝそれ以外に勤めたことのない私
にそゞろに意氣地のない心をむちうちましたことが幾度
それも烏に鶯の音は出せませぬやうにいつも私はその心を恨んでおりました

幸ひと義彦氏が良緣があつてるい子さんを迎へられこゝに上原家の基礎が定まりました矢先に山澤先生からの御內命で私に辭職するやうにとのことで早速御受けいたしまして堂々たる東大敎會長を得ましたのは大正九年十月二十五日午前十時でありました
私は心ならず十年の長月日を東大敎會長事務取扱といふ職を奉じましたそれは私の力でない役員の人達がどふやら無事に勤めさして呉れたことは申までもないこと
其の間になぜ讓らないのか不理解な男だと申されたこともありますまた椿ももふぼけたのやらう早う渡してしまへばいゝとの御說も伺つたこともあります
其の時私は心に涙をこぼしましたことがどれほどでせう
私をかじり付主義のやうに申すその人に私は心の限りを打明けてみやうと思ひましたがそれも要のないことといづれ時節到來と罵られても笑はれてもそのまゝでお

りました居らざるの止むないことでございました
それは唯あなただけがせめて私の愧かしいながらの心を見はるかし座すものとそれのみ力といたしておりました
これは思ひの外の繰言さぞ御聞苦しうございませう御許しを願ひます
義彦氏御就任後も總てが圓滿に克く和しております御心配をかけることは一切ありません
御蔭様で私もやつと肩の荷物がおりましたといふものけれどそれは制度の上だけでまだ〳〵私自身には仕遂なければならぬ仕事が山を爲しております
どうか今迄のやうに御守りをいたゞきまして東の光は常へに榊の色うつろはず永久に榮えますやう御守をいたゞきたうございます

噫脇坂先生

○

五十四萬石は仙臺の城下その鐵砲町といへば東京で下谷坂本といふ格の處でさみしい町である細いながら二本の石柱それが青葉宣教所の門である
所長玉造氏は家庭の事情で專念教會奉仕のならぬ處から脇坂先生が妻子を引連れてこゝに努力の種をまかれたのはもふ六七年になる

○

湯島三組町に鼻緒問屋を先生の父君が經營していられて弟子達には相當に身を立てゝいる人が多い日本橋大教會役員福田鎗一郎氏なども其一人である

○

明治廿三年頃からの信者で先生の父母は熱心なる人であつた後ち先生は營業の總

てを投棄てゝ谿郷分教會の役員となつた其温厚なる君子振は能く内外の信用をつながれた

○

松本會長の親族の一女は先生の愛妻となつて現に先生歸幽の手向の水までとられたのである

○

これからが男らしい落付いた働らきがでける四十九歳での出直は獨りその縁者の人のみでなくお道の上に於て甚だおしむべきことゝいはねばならぬ

○

思ひ起す仙臺琵琶首町に菊地猪四郎氏が所長たりし時代の青葉宣教所は恐らしいまでの野心家であつた神憑りの迷信も一時は信徒の一部に信ぜられたから打置兼ねると本文の記者は松本前原（此人今世になし）の兩氏と仙臺境屋旅館に陣を布

きて花々しき戰鬪までしたことがあつた

○

爾來分散したその一部をまとめて材木町の假設から今の鐵砲町に至る迄の青葉宣教所は谿郷分教會の容易ならぬ大骨折りであつた

○

やゝ落付き加減になつたのが鐵砲町以來でそれが脇坂先生の努力の結晶といふのが至當である山來仙臺に山名部内の仙臺分教會はあるが不振の極に達して巨大なる古堂となつて何等威力もない青葉も又琵琶首以來の大疵のまだ癒へ切らない爲めに意の如き活動を缺く仙臺の地何ぞ本教に災害するかの嘆を發するものもあつた

○

峠の頂上近く倒れられた脇坂先生は實に殘念である

染井の奥都城深く遺骨は埋まつても芳名は斯道のあらん限り朽ちるべきでない
青葉宣教所も目下谿郷分教會に於て相當の後継者（或は以前の玉造氏なるか）を
定めて益々發展の途に就くべく先生の靈魂も幸ひに地下に冥せられたい

いのりの聲

天理王の命様私の罪をおゆるしください教祖様大慈悲のおめぐみで再び私をお
すくいください弱行な私は大きなおめぐみに一度は救ひ上げられてどうやらと思
ふと束の間又元の心になりまして日夜の苦悶それは〳〵もがいてもかきむしつて
も足りない苦悶が堪える間がございません天理王の命様私の罪をおゆるしくださ
い教祖様大慈悲のおめぐみで再び私をお救ひください

枯れゆく秋のきりぎりす鳴く音もやゝに衰ろへゆくそもこの祈りは何の爲の祈り
であるか祈る人こそ何處の人であろふかはては泣く聲もひくゝなつてすゝり泣く
それが毎夜〳〵つゞくのである

ある夜のことであるその人は唯おすくひを祈つても「なまぬるい」祈りであることが自覺せられた赤裸に自分の過去をのべて恐ろしかつたらと無氣力であつたらとなどがひし〳〵と胸を刺すまでに懺悔していた

こゝに設けました宣教所は金の力や人の力やを臺として成りましたものと今になつて悟りました私自身に何の覺悟もなく賴まれて所長になつたやうなものでありました私には祖先より傳へられた田畑が相當にありまして宣教所そのものがどう盛衰があらうと私の財産や私の身には格別の關係をもちません私は一個の農民として此村には確い信用をもつております宣教所がよしや倒れても私は少しの手疵を受けず立派に農民として活歩がでけるのでありました

そして私は經濟の上にも名譽の上にも少しの野心もなく清い心の所長であるとかう私は信じておりました

集まつて來る人も皆私から見ると目下のもので平生から旦那と呼ばれております

から宣教所へ來ても所長さんとも先生とも人は申しません不相變旦那呼はわりで

永い年月をくらしましたその中でも嫁をせわしてやつたものや金を貸したものや

私の爲に恩をうけている者が大部分でありましたから私の申すことは二言となく

皆が承知してくれました

他處の教會は役員がもめるとか會長に信認が薄いとか風説をきゝますが私だけ

はこの通りと大平の夢をむさぼつておりました

申さば私は農民としての信用を臺として教會に居るのでありました教會の役員と

して皆も働らいてくれたのでなくむづかしいやうですが私の家の延長したものが

宣教所でありました

それでありますから道の仕込みも運びつくしの道も頓どかまわずに居りましたのが實に申す言葉のないやり方でありました

根の淺いものは風に倒れやすいときかされております通り役員たちは色々の事情や老衰や出直しの爲に今日といふ今日は一人もなくなりまして御神前の太鼓も月〳〵一度月次祭の日に親教會からおいでの時に打つだけであとは埃りにまかせた此始末

家内の者も私と似た薄志弱行で何の相談相手にもならず曇る日も晴る日も私一人尋ねて來る人もなく煙草にもあき果てゝも扱てこれをこうしようと　勇氣もなく世間で申すと神經衰弱にかゝつた人のように茫然としてみたり何の事なしにほろりと一しづく涙を火鉢におとしたり致しておりますうちに本年の春四十年祭のお話をうけたまわりまして何處の教會も人手が足りないまでに活働をなさるのを見

てつく〳〵私は骨に達する悲しみを覺えました

働かうとしても運ばうとしても相手がおりません矢竹にはやる心どこんな不自由な形とは毎夜〳〵私が私を責めてせめて責めぬきます

私が私を責めますのは身から出たさびではありますが再び得がたい今日に當つて人並みの御奉公がでけぬ私は神様教祖様にどの顔をもつて御詫をいたしませう

苦悶はこれでございます

天理王之命様私を御救ひください教祖様どうぞおたすけください

その人はさうして日夜をつゞけております淋しい村にそんなたよりない心が燈心のあかりもおぼろげにあたりは薄暗い神前で心から懺悔をしております

もんかたない處をみちつけたのは百姓家の老母一人何の學問もない何もなろうたものやないそれが眞實を臺として道をつけた

この意味のお言葉を親教會の先生にきかされたその人は見事に蘇生しました立派に生れかわりました空虛な心に眞實が充ちると顏の相まで變つて一人でやれる一人でやれると繰替へして今は倒れた講社やいづんだ教員を日毎夜毎に訪問しております

さびれた村のさみしい宣教所は涼しい夏の夕も蒸しあついまでに人が集まるやうになるでせう

筆者もそれを祈つてやみません

彼は木偶か

一、

さみしげの旅人は人生の旅へ上つた

彼は小川や林や森やを通つてあやしげの軒の下さては野の末に宿つたであろふ

逆まく波に膽を寒くしたのも彼である

ゆくりなくも彼は一つの山の麓にたどりついた山を登ることは不得手の彼は逃辭やら弱言やを吹いて辭した

けれど彼の運命は終に登山の止むなきに至らしめた彼はそのぶかつかうな形を上に〳〵と運んだ彼は心中たゆみなく恐れていたであろふ

彼の登山は九ケ年を要した

けれど彼の登山は性格を一變せしめた

まけおしみの強い――強情一天張――人を人くさく思はぬ大膽それが登山の賜であつた否寧ろ彼の爲には禍根であつた

九年目にはもふ下り坂に出た彼は其急轉直下に目をまわした

たわいなく平地にでられた彼は過去をその大なる山に遮ぎられて肉眼に見えないのを深く悲しんだと同時におのれの心の移りかわりにも一層おどろいた

境遇は人をつくるともいふがそれは境遇の爲ばかりじやない彼の因縁が現れてかくせしめたに違ひあるまい

彼はこれからのゆく道を考へたさうであろふ誰でも考へずにいられるものじやない

彼は男らしくなく誰かを我標準にしやうとも思ふたけれど彼の目には賢こい人や所謂えらい人やが目の前をうろついてどう標準を立てゝよいかわからなくなつたこれは失敗つたと彼は考へ直したとても人の眞似はだめだ尊といものじやないか

う彼は悟つた

とてものことにわが心からと氣付いた彼はこゝで非常な煩悶せずにいられぬ

火の見のやうな高い處で上は目をつかうたものが平地に下りて下目をつかうてゆくこの極端な變革はずいぶん辛いことであらう

彼は意を決してから定めた

とてもおのれの心からよい思案などでそうにない

それを無理にとやるから無駄である

かう決心してさて次のやうに方向を定めた

今の心はさびているその光は包まれてしまふている先づさびをけづることが先決問題ださびさへとればたとへあやしげな彼の心にも光はあろふ

その光りがでゝから明らかな道が生れる

馬車馬の一直線に彼はかうきめてしもうた

そして彼のゆくすへはどんな事をするであろふ

二、

はじめて道に入つた時のざんげそれは根底から洗ひ切るやうにでけるけれどなまなか道を知つてからほこりはとりにくい

兎角その知り人と比較したがるからで誰はかうである彼はあゝであるそして平氣で丈夫で居るこんな愚な考へが出ればこそ我ほこりはとれるものじやない

一名一人限りとは何ごとにも共通の御言葉である

よしや惡しきな行爲があつても見た處健康で愉快な人もある眞面目で正直でやつていても身上のたえない人もある

それもこれも一名一人限りの理であるから杓子定規では量れない

どふしても自分を改めるものは自分であるそして少しでも人を見ないで自分を改めることが正しき道である

改めるのは進むのである働くのである勤めるのである

こゝのとりちがひは恐ろしい結果を生じる

引込んでいやう無言でいよう仕事をせずにいやうといふやうな事はそれは改めたのでなく死んだのである精神的に死んだのである

死ぬ爲に改める人はないけれど爲り方によるとさうなる

三、

磨きみがけ神の教の砥にかけておのが心のひかりてるまでとは古人の歌である

今や唯此一路にさまやうことなくやる外はない

彼はやつぱり馬車馬式に一直線に生理的に老ひても靈的に若く仕事をすることが當然と定めた併し彼は彼である過去が幾分未來を彷彿せしめるものなら彼は何年經つても木偶たるをまぬがれぬであろう

露光量違いの為重複撮影

春の雨とづれ

盡日尋春不見春

△

婦人布教者が男性化するといふ成程さうも見られる

どこか角が立つて來て婦人のやさしみが薄らいで行く

すると他の人がそれは形ちから來た迷想だ我婦人布教者は紋附の木綿羽織にじみな衣服で着かざらぬ質實な姿からさう思ふのであると辯護している

△

辯護はどこまでも辯護である私は婦人布教者に婦人のやさしみを失はぬやう願つておく

△

路傍講演が初められた諸方に其實を見る東本の人やひのきしん學舎の人や又東の

露光量違いの為重複撮影

春のおとづれ

盡日尋春不見春

△

婦人布教者が男性化するといふ成程さうも見られる

どこか角が立つて來て婦人のやさしみが薄らいで行く

すると他の人がそれは形ちから來た迷想だ我婦人布教者は紋附の木綿羽織にじみな衣服で着かざらぬ質實な姿からさう思ふのであると辯護している

△

辯護はどこまでも辯護である私は婦人布教者に婦人のやさしみを失はぬやう願つておく

△

路傍講演が初められた諸方に其實を見る東本の人やひのきしん學舍の人や又東の

新生會の人や都に鄙にやつている往來の人も能く集まつて呉れる

△

それが時代の反響かあまり辯士質問と出て來ないこれが十年も前なら毎夜飛び込んで論難の絶え間があるまい不眞面目か冷淡か

△

講演者が淺草公園をと願ふたが許されないとのことで車置場の暗い便所の傍らでやつていた

あまりお爲にならぬ人や我利を貪ぼる商人らは公園を我物顔にして講演者はみじめな場所でやるのはなさけない

△

ヘンリーワルトビーチャーといふ人はその學生に敎へて曰く

諸君若し國務大臣となるが如き小さき野心を抱くものあらば傳道者となる勿れ

忍ぶも道の爲勤むるも神の爲千難萬苦も我心をきづつけることがでけないといふ處に布教者の眞の光がある

△

生れるのは朝日の華やかである死するのは夕ばへの清らかである不平を抱き病苦を負ひての一生はとても清い夕榮へは見られない

△

井上哲博士といへば一時飛ぶ鳥も落さん勢ひであつたが學問が古くなつたとの故で今では元老株となられた十一月廿一日帝大八角堂に東亞協會の講演會があつて參聽千五百建部博士平沼博士後藤男爵などの顏ぶれで終りに我國體に關して世の誤謬を破るといふ長い演題で登壇した博士は見劣りのするやうに姿は低くなられた想ひ起す明治二十四年芝櫻川町神道本局に大會議のあつたあとで先生の歸朝ほやほやの處を願つて神道に對する意見を發表してもらふた其時は僕、なども毛では人にまけぬ方で先生も美しく別けられた頭髪であつたが今見ると立派な禿頭となられた拜聽する僕も苦笑を禁ぜなかつた

約三十年の月日は双方を禿頭にしてしもふた

寒中の鯉

ある所の不孝ものが二十四孝の話をきいて感心し現に食はそうと思へば寒中の鯉雪中の筍も自由だと思ふて家へ歸りて母に向つて竹の子は食いたくはないかといふた

母は齒が惡いでいやだといふ

そんなら鯉はどうだ

母は氣の毒げに此　寒い中に鯉なぞ心配せずと親切がちるなら甘酒でもくれと賴むと

悴はエイ此我儘ものめ二十四孝に甘酒はないぞ

八埃をうたふ

——よ　く——

黄金の海に棹をさし
名譽の山に杖をひく
色をあさりて身を汚し
月雪花をわがものと
あかぬ望は玉の緒の
そのみじかきを悟り得ず
靈のゆくへも知らでこそ
流るゝ血をもことゝせず
そがるゝ肉をよそにみて

我身肥ゆれば人の身は
寒さに氷る風の夜半
飢にさけばむ雨の日も
あだにすごすぞそも人か
すゞしき夏のたかどのも
綿あたゝかく着ることも
蚊遣りにむせぶ賤が家
こけの衣もさむげなる
あはれのさまをよそにして
馬に鞭うち玉しきの
都の大路小路まで
狹しと飛ばす砂けむり

あらぬ望の身にあまり
ななつのほこりの根となりて
鏡の曇り晴れ間なし
うたてやその身は人なれど
山の獣のこゝろなる

——ほしい——

琵琶の湖水溢れ
あたりをけがす泥の海
かほど深くはあるなれど
廣くはあれと程すぎて
あふるゝことの是非もなき

わが身のほどをわきまへよ
ほどにたんのふしたならば
世界もひろく身も輕し
まめで氣易く勇むのは
財や名譽にすぐるゝぞ
よくをはなれてひのきしん
清き水にぞ月は澄む

——おしい——

つかはぬ刄物に錆生じ
怠ける人の身はよわし
かせぐは身の爲國の爲

うけた利益はこまる人
なんぎな才に施せよ
寶はつかうが寶なる
金函におさめて盡すべき
義務をも缺いておしむこそ
人の爲にぞそむくなり
禍根はそこに芽を出さむ

——かはい——

愛は心の花なれど
正しからざる愛ぞ憂き
清き愛には睦みあり

不淨の愛には罪こもる
一歩たがへば千里の差
傾く器の水もたず
曲る心は暗となる
花は咲けども忘るゝな
人の花こそうつくしと
垣をこゆるは罪なるぞ

——にくい——

果なき人の心には
天地も自由と蹈ちがひ
暗き林にわけいれば

胸の月影光なく
我身のすきを基として
是非も正邪もわかちなく
すきなる人を近づけて
嫌ろふを避けて憎むなる
すきにも石はあるならん
嫌ふ人にも玉あらむ

——うらみ——

己れの不義を正されて
恨むはおろかな心なる
たえぬ思ひのありとても

まいたる種のむくひぞと
人を恨みなうらみては
またかやされて果しなき
めぐる車のあとやさき
嘲ける聲のきこゆども
さゝめく人のあればとて
花は咲くなり鳥も鳴く

——はらだち——

小川のみづは濁れども
海のあなたは澄み渡る
月なじりたてゝ大音聲

こぶしにぎりて狂ふこそ
仇なる浪の立さわぐ
たらぬ心の不徳なる
しのぶは糧ぞ世の人は
笑はゞわらへ憚らず
毀譽褒貶の外にこそ
道の眞は輝けり

——かうまん——

百聲千こゑの雀より
鶴の一聲尊しや
足らぬ其の身をしらずして

振りするさまぞおかしけれ
成らぬを成るといひつのり
理を非とまげておしてゆく
人にきらわる心こそ
神も悲しとおぼさんを
心して鳴けむら雀
聲は力の影なれば

苦しい昔と樂しい今日

御尋ねに預かりました飯田金藏は私でございます折角のことではありますが何一つおはなしすることもございませんがほんの一言きいていただきます

（犢橋講社の發端）

私の弟に喜三郎と申すものがありまして東京に住居しておりましたが明治廿五年頃京橋の柴田先生のおかげでお道の人にさしていたゞきまして私へ段々神様の結構をきかしてくれましたので私も初て御守護を蒙りまして家内中大喜び二十年祭の節には受驗しまして權訓導に登用せられましたが不幸にして弟は早世致しました處から私がそのあとを引受けて布教さしてもらふておりました

（一子を授かる）

私の今の妻のいくと結婚して十九年にもなりますが一人も子供がございません到底ないものと覺悟して居りましたが十九年目に男の子が生れまして唯今尋常六年を卒業致して中學へいれるまでになりました

私事に亘つておそれいりました

講社は追々に增加しまして終に犢橋宣教所を御願することゝなりました

（名稱御認可）

私の住居は東金街道に當りましたさみしい村でありますいくら千葉縣でももつと町らしいそして便利な處もありませうが神様の御思召は知れませんもので幕張驛から二里の不便の唯今の場所へ御認可を得るといふのは人間の考へのつかぬことでございます

嬉しいことには村の人は深く信じて呉れまして大祭や月次祭などは村でも休んでくれまた参拝に参ります信徒名簿には加へませんが信徒同様に村中が心をよせてくれます

（私の性行）

田舎で育ちました私のことで廣い世界を知りませんからでもありませうが私は兎角心の小さいもので何ぞといふとすぐと「案じ心」が先に立ちます處からいつも心の休みのあつたことがないので御座居ます御助けに行くにも若し助られなかつたらどうしようとか金の約束しても出來なかつたら困るとか何がなんでもきつとあんじが先に立ちますことを毎度柴田先生から御教訓受けておりましたが今では少しも左様なせいしんはございません

（心の立替へ）

所長とさへしていたゞいた私が講社の人に笑はれるやうではと深く悟りましてもう藥にしたくもあんじなどはいたしません神様まかせの一天張で清く安く通らしていたゞいております當年五十九歳だん〳〵身上が丈夫で夜中でも二里や三里の先まで運ばしてもらうにちつとも苦勞はいたしません

（昔の夢）

廣々とした處にちつとも汚れなく安々と勇んで通らしていただいている今日から昔をおもひますとうなされていた夢でありましたそのくるしい夢のさめたのは神様の深いお惠みの外はございませんとても一代で御恩は報ひられません私共夫婦は子供の頭と足を引張つて背がのびるのならと毎夜物語つて成人を一日も早く祈つておりますやがては別科のおせわになつて伜も一筋に此道を熱烈に盡さしても

らうよう忘れた時はございませんつまらぬことでお耳をけがしました私が申上たいのはこれだけでございます

行け!!! 一直線

御道の奔走する人に素より堅い〳〵信念があつてどんな迫害にあうても困難がきても貧乏ゆるぎもしないで唯一筋に進むことを知つて退くことを知らぬ決意でなければならぬ

現在の布教する方々はいづれも此覺悟で寒暑や雨雪は物の數でないとの強い信念であることは私が保證したい處である

何故に布教する人がこの信念ができたかは申すまでもない神恩に報い奉る の一語でつきる我身の迫害や我家の勘定やそんな事は眼中にない一意專心道の爲に勤め勵みて日も尙ほ足らぬといふ次第である

それで甚だ申にくい事であるがこの頃になつて弱い言葉がちらほら聞えて來た悲しむべきそれが行爲であると思はれる

御道の奔走もごうも金がないとまゝにならぬ學問がないとだめであるひまがないと勤まらぬと理屈らしい不理屈を理屈らしく言ひ立てゝゐる

所謂ひまと學問と金とかう武裝してさて戰場へ出やうといふのでそれが整はぬと

つまり御道の奔走はでけないとの意氣地なしである薄志弱行の人であるそして我は熱心であるが境遇がさうせしめぬといふ圓滑な怠勤者である

中には眞面目にそれを信じてゐる人もあらうなれど私は怠勤者と名付ける人が多くはあるまいかと悲しむ

一體ひまといふ者はその事業に熱心すればいくらも在るものであるちと下等な例であるが行くなと監督しられていても目をぬすんで行くすきな事もある

要は心の立て方でどうでもなるのがひまであつて私にいはせるとひまがないといふのは一種の逃辭で實は不熱心から起る怠勤者であると斷じられる

學問は今日唯一無二の大切なもので全國學校の設けのないものはない然し學問と

一口にいふてのけても千種萬別で學問の目的は修身齋家といふたのは昔しであつて今日は科學萬能の世の中所謂食ふ爲に或る學問をするといふので米の種になるのであつて人を助けるとか身を修めるとかはだん〳〵緣遠いことに成り勝ちである

或る人に言はせると敎育のある人は罪惡は犯さないたとへ犯しても深入りせず悔悟が早いそれゆゑに敎育はかゝしてならぬとかう議論立てゝの說で斯くありたいが事實はこれを裏切つて敎育のないものは露骨な罪の犯し方で巧妙なやり方は反つて敎育ある人に多い

實際かわり行く世の中の裏面は千態萬別文化だ平和だといふてもどれほど敎育が恰ねくわたつても人間の心の底までそうぢする道はないのである

助け一條の道は全然と敎育と別途に進むのである調和が出來ないのでない調和の要を認めないのである

學問萬能の世の中に何等の教育を受けぬとか又低級の教育であるとかすると心細く感じるのであらうが今いふ通り獨行奮進他を省みるべきでない

學問をたよりとし教育によることのみに重きをおいて肝心の尊とい信念が夏の飴のように知らず〳〵の間にとろけてゆくようでは本を失ふて花も實もなくなる露

國の書家で平和論者で名高いヴエレスチヤギンといふ人は戰爭の恐しいことばかり書がいて居つた即ち非戰主義皷吹であつた

しかし恐ろしい戰爭の書をかくには實戰を見なければならぬ

チヤギンはいつも戰爭とさへ聞けば從軍して書材を得るに吸々して居る間にいつしか戰爭とはさう非認する計りでなく正義の爲には不得止仕事だと悟つた

近づいて居た永い間の感化はおそろしいものである

明治三十七年四月十三日旅順口の戰に沈沒したる露艦ペテルスバーク號にはチヤギンも乘つてゐて共に水底に葬られた

私は今此實例によつて云はうとするのはあまり學問〳〵とその方へ心をとられるといつしか已の心を濁すことがでける性格に色付けられては純の白でない

それでは助一條に遠い路を歩むやうになつてしまう

その次が金である

これが誰れも不用といふものはないもので金錢によれば飛ぶ首もつなげるとさへ云ふた時代もある

然も落付いて金といふものが公益慈善の爲にどれだけの力があるか人の爲となるのはどれほどかと考へておいて次に金の爲に造る罪惡は幾何かと二つの思案を双べると乍殘念善用することが微少で惡用し罪を造り人格をそこね終身人中へ顔出し出來ぬようになることなどを思ふと金はちと考へものである

金をもたねば苦しい

金をもつのは恐ろしい

此の二句は實際であらう御互ひに布教上の實感もさうである

けれどその利用するといふことゝ必要視することゝ違ふと思ふ一方は金につかわれる一方は金をつかうのである多くは前者に屬する爲に色々な問題が生ずるのである

私はその事をたしかめる爲に御教祖の上に就て一寸御話さしてもらう

御事蹟には天保十年の處に

爾來神命のまゝに御所持のものを始めとし田畑山林に至る迄金穀に代へて施し給ふ

安政二年の處に（十六年後）

善兵衞殿御死去當時遺産としては田地三丁歩ありしも之を十年間の年切質として慈悲の料に充て給ふ

爾來貧苦艱難の道を通り給ふ

小寒樣の糸紡ぎ秀司樣の行商もこの時であらせられた

爾來十年間は貧の谷底に陷るとある

文久三年仲田、辻、山澤の三先生の信仰につかれるそれまでの十年間の御苦しみの道は信徒として特に忘るべからざる時である

素より御教祖は貧福順逆の爲に御心を二三になさるはけでないことはいふ迄もないが此貧の谷底の十年間は恐らく最も光輝ある最も堅忍不拔の御時とお察しせられる

堂々たりし中山家さへ道具類は賣却せられ疊も建具も取はづしたあとは淋しい空家も同然であらう

神命とは申しながら此内にあつて御教理のその基礎を確かめられたのであろふと思ふ

木の香の高い神殿や絹織物の裝束やは現今なればこそ無心に見て通るものゝ一度

思ひをこゝにいたさば夏尚寒き感じを起さゞるもの幾人であるか

例を此一事にとるのはちと極端のきらいもあるが金がなければ布教がでけぬといふ弱い志の人は此邊をちと考へたがよからうと思ふ

金は人の心をにぶらすゆるめる要するに不條理の安心を與へる生氣はぬけ活働は妨げられるのである

もしも腐りたい鈍りたいと思ふ人があつたら金を持つてみるがいゝ必ずその結果を生む

苟も布教に身を委ね終身を神にさゝげたものが金がないから位に落膽して天氣模様を見るやうでは到底船をその目的の港につけることは至難といはなければならぬ

ひまのないと嘆く人や學問がないと失望する人や金がなくて困る人そういう人はその薄志の關を踏破つてこそ初めて廣々とした心になれることを思へ

何事にも關所はある我々の心の道には大小の關所は心がらで隨時現はれてくる嚴めしい關守に恐れて裏道やぬけ道を通るやうでは人らしい人といへない

立派に確實に關所を通る覺悟がなければならぬ

今や人心は日々に墮落の底に達せんとしてゐる國を愛し同胞を思ふものは決然として老も若きも立たなければならぬ

御教祖の大慈悲は發して心を助け病を救ひ家を齋へ野に山にあらゆる救濟にあらはれてゐる

神様の御自由用と御教祖の大慈悲を双肩に荷ふて眞實布教する人は深く反省と同時に大に猛進してほしい

△ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △

冷藏函

○夏は腐る總てのものが見るくさる飯も菜も翌日になつて食へるものはない
○それでは困ると發明したのが冷藏函だ氷の十錢も入れておくと妙に翌日まで清新である
○ところがその清新が函から出すと一時間保たない「マグロ」の刺身などは三十分ももつまい
○人工は人工である自然に勝てない一時は超自然的の處もあるが忽ち馬脚とくる
○人間の腐るのは夏に限らない四季時をきらわず腐敗物である多くは金でくさられる
○府市の狀體は千萬言より强い證據を示しているそこで腐つた人を悔悟さす爲監獄に入れる

○何のことはない人間の冷藏函入りだ甲は腐らさぬ爲乙は腐れを直す爲め
○規律立つた生活か時折の教悔や半年一年を過すと出獄したらと覺悟は大分美くしくなる
○出迎や自動車やと一度門を出れば浮世の生臭ひ風がその覺悟をあとなくとろけさす
○へい又參りましたと平氣で入獄を敢てするものもあるこんなのは死なゝければ直らぬのか
○大戰爭の後は錢貫けが荒らく從つて成金の暴飲荒色も盛んである
○私は腐らさぬ内若くは腐り切らぬ間に冷藏函へ入れたらよかろうと思ふ
○完全な冷藏函それは宗教の力にまつの外はない無宗教者たる人々に再考をすゝめる

浮び上つた喜び

私は眞野治平（假名）と申しまして妻と子供二人と四人暮しのものであります
元は千葉縣の某所で相當の農でありましたが重なる災難で祖先の地に永住もならず夜逃同樣東京へ參りましたが慣れぬ商法はでけず差詰め勞働者にと思ふておりましたが住む家もなく花の都ときいて居りましたが私計りは獨り冷かな風に吹き荒される心地で安い一日もありませんでした
國の親族に七重八重にすがりましたがお前には家をあてがつても見込がないといふて荷船の古いのを買つてくれました
舟の生活を一寸お聞きくださる方はヲッなもの〳〵やうに思召でせうが地代も家賃も出ないといふ經濟から生みだしたもので船と申しますもの〳〵大古船で色々修繕しましてアカのはいるのを留めたくらいです

それからトバで屋根をきりまして雨の朝も風の夕べもこゝが金城鐵壁の一廓といたしました
まあ住居だけきまつたとおもふと家内が脚氣をわづらひまして腰拔けとなつたではございませんか
惡い時にはわるいもので私がリョウマチスを惱みまして働き人が二人までの病氣の爲に小兒二人も食ふものも食はずに居るくらいでありました
醫師にかゝろうにも金はなし二人は惱みたいだけ惱むといふ形ちで實に目も當てられません
船をつないでおきますのが大川の堀割で佃島の前に當つております
國へ通知をしても誰れもあいてになつてくれず親子四人は見るみる餓死するの外はなかつたのでございます
さうゆう中に何處からおきゝくださつたか態々きたない船へお尋ねくださつたの

は吳服町に天理教をひろめておいでの齋藤おきよさんであります
御親切に一日もかゝさず御運びでその上にお米やお金まで惠んでくださいまして
地獄に佛といひますがそれよりも私の救はれたことはその上であろふと思ひます
お茶一つ上げることもでけぬ貧乏ぐらしの上に夫婦病氣といふので大概の方なら
あいそづかしをなさるでせうが物うとい夫婦をくわしい尊とい御話をくだされま
したので今までの通つた道を省みますとこんな惱みや貧乏は皆自分のわるかつた
事がわかりまして親族を恨んだり世の中をのろうたりは實際大間違であることも
氣が付きまして朝日夕日の力を朝晩拜しまして一生懸命の御信心は終に綺麗に御
守護をいたゞけたのでございます
谷底から助けてやると教祖様の御言葉もしみ〴〵と有りがたいことに感じ入りま
した助けるといふことは眞に私等のやうなものが救はれることであろふと嬉しく
てたまりませんことを一寸御披露さしていたゞきました

はたらき

今日は月々の婦人會でありまして至らぬ私も出席さしてもらいました處から一言
御取次をさして戴きます
美くしい花や可愛い蝶やと申しておりますうちに若葉が繁つて參りまして日蔭が
涼しいやうにいさましい夏となつて參りました
それからそれへと世の中はちつとも止まつておりませんのと同じく萬の物が育つ
てゆく變つてゆくことは皆神様の御働きでありまして古歌にも
目に見えぬものとは云はじあけくれの月日ぞ元の神の光を
全く神様は無形でみることはでけんともうす人もありますが唯今もうします如く
あり〳〵と拜ましていたゞけるのでございます
ことに神様の御働らきは一寸の間もつとめはたらきと云ふことはたゆみなくさし

て戴くことが結構とぞんじます
御教祖様が二十年一月御昇天になりまして二十一年に教祖殿を建てさしてもらいたいと御願の時の御指圖に
神は外へ出てはたらきつゞけている折角建てゝくれてもそこで休んでいることはでけん
こうゆう意味の御言葉でございましたから一時御延期をなさつたと承はつております
かみ様がこれほどの深い思召で御守護くださるのでありますから人間も心の弓をゆるめづいつも張つめて油断なく働かしてもらうのが修理固成の御詔の御旨意にかなうのであります
身分に應じてそれ〳〵はたらきの筋はちがひませうが何事をさしてもらふにも眞實こめたことならば皆神様のおうけとりが在りまして天の理にかなうのであります

す
汗は働きから出てくる水晶の玉でありますどうぞ清い心でうつくしい汗を流して天理にかなうはたらきしていたゞきたいと存じます
あと〳〵御出席の方もございますので私はこれで失禮さしていたゞきます

電燈の光は強しされど我心の隅の形を照さず
腕はふるい舌はたゞれて数へ説くにぶき心よ恥かしき我

田中會長

教師名簿には明治二十五年六月教導職試補拜命とあつて隨分古い教師であつた田中常次郎氏は大正九年五月四日を一期として歸幽せられた

年は七十一遺族は娘せい子は聟養子太一氏と二人の孫もあつて睦まじい家庭であつた

王子に名稱を置いてそこで會長を拜命せられたのであるが其家屋持主の子供が變死した處から急に家明を請求するやうな間違が出來て板橋の小さな家へ移轉した後に新築がでけて瀧の川支教會の標札の出せるやうになつたのが今の教會である

御道の爲には苦勞もせられたが質素の性であるから花々しくその評判もないのが殘念である

五月雨の中に葬儀は五月七日染井に厚葬られてさみしい塚の主となられた

牛込分教會承事東大教會承事の二役は氏の生前の職務であつていつの會議にも缺席したことのない堅氣であつたがもふ見ることもできないのは悲しみの極みである

呈東葛飾宣教所長

以前は草深いわかりにくい處にあつたあなたの教會も四五年前二川村の内でも街道際のわかりのいゝ有名な白帆點々ゆうゆうと流るゝ江戸川の寶珠花の渡船場から呼べば答へる便利な處に移られたのは慥に一新區劃をせられたことゝ思ひます家は小學校舍に使用したものとはいへ瓦葺の堂々たるもので往來の人がながめても宣教所としては決して恥かしくないものと申しております

内田前所長が病沒のあとは金子德右衛門さんあなたが後任として十數ケ所の部内宣教所を統一すべき大任を双肩に荷はれることになつております

木間ケ瀬の御嶽さんの行者であつたあなたは早くも本教の結構さを知つて轉屬せられたのはもうかれこれ三十年の昔になりました

役員が年々に減じてゆく東葛飾宣教所もあなたがどのくらい前所長の腕とも力

ともなられたでせう

けれど時の爲でもありますまいが存在さへ疑はれるくらい淋しい教會であつたことは少し古い者が知つております

それから後任所長としてもあなたは力一杯には働らいておられると皆は認めております

ところが其割合に教會が盛大にならぬのは何の故でせう私は私の愚なる考へを述べて一應尊臺の反省を願ひたいと思ふて茲に開書を呈しました所以であります

三年ほど前にあなたの教會で講習をひらいた事もありました

又復業をやめてくれと苦言を呈したこともありました

それから後任候補者を集めたこともあなたは覺へておられませう

それは私のみでなく淺草、立野堀、四丁野、野田あたりからあなたの教會を立派なものに造り上げたいと隨分努力したこともあなたはよもやお忘れになりますまい

露光量違いの為重複撮影

雨　あ　が　り

勿論それは通常のことではありますが特に心を砕いて居ることは認めておいでになるでせう

かように力瘤をいれているにもかゝはらず幕に鐵砲の形ちで頓と現はれて參らないのが如何にも殘念に存じます決して追々衰微するなどではないのでありますがもつと〳〵盛大になるべき順序でありながらいつも〳〵あなたの勝れない顏色を見るのはどうゆうわけでせう

芝居なら淺黃幕を切ておとしたように明らかに私の心の奥を示しませう

あなたは成程一人の力の限りをお道に盡していられませうがあなたはあなただけの力で後押がない

家族の人があなたのせめて半分も心をつくしたなら私の所期した隆盛はきつと見せていたゞけるでせうが悲しいかな働らいてくたぶれくたぶれては働くあなたでは休み〳〵の盡力のようで家族の後押のないことがどれほどあなた

露光量違いの為重複撮影

雨あがり

勿論それは通常のことではありますが特に心を砕いて居ることは認めておいでになるでせう

かように力瘤をいれているにもかゝはらず幕に鐵砲の形ちで頓と現はれて參らないのが如何にも殘念に存じます決して追々衰微するなどではないのでありますがもつと〳〵盛大になるべき順序でありながらいつも〳〵あなたの勝れない顏色を見るのはどうゆうわけでせう

芝居なら淺黃幕を切ておとしたように明らかに私の心の奥を示しませう

あなたは成程一人の力の限りをお道に盡していられませうがあなたはあなただけの力で後押がない

家族の人があなたのせめて半分も心をつくしたなら私の所期した隆盛はきっと見せていたゞけるでせうが悲しいかな働らいてくたぶれくたぶれては働くあなたでは休み〳〵の盡力のようで家族の後押のないことがどれほどあなた

に心弱いことになるでせう

私はかう思ひます一思案してください

上高野も久しく所長さん一人での盡し方が野田講習以來家族の方が全然方針をかへて後れはしましたが此頃全家教會へ入込となつて一つ心に家族中が働らいてくだされてあることはあなたも御聞及びとぞんじます

今は總てのことを改めるによい時であります

野田の會長さんなりどなたなりに家族中を説いてもろふて全家で神様にお仕へになるように改めることが急務であります

あなたが今もいふよふな淋しいやり方をなさるからそれに能く似た教會もあなたの受持の部内にありませう

それは影であなたの心が形であります本體であります

埼玉縣へかけて十五六ケ所の宣教所の興廢はよしや直接にあなたの受持ばかりで

はありますまいがあなたの老軀にむちうつて齋藤實盛ではないが白髪を染めて或は寶珠花に或は岩井に先登に立つて野外講演でもやる氣におなりなさい

上級の先生に斗りもたれている斗りがあなたの役じやありません

それからせつせと講社廻りをしてください頼みに來ないから行かないとか無人で出られないとかいふのは皆人間のなまけ根性であります

私はどこやら二川村のあなたの教會を深くわすれられぬ一つになつておりますあなたは私の今のべたことを「大きなお世話だこちらでは充分改良しております」とくわへぎせるでお笑ひなさることは反て私の願ふ處でありますそれほどあなたに自信が強くなつて諸事萬事敏速に活潑に大努力してくださるならば何を好んで此一書をかきませう

金子德右衛門さん永い〳〵お馴染の私は心に餘ります處から御覽の通りこれをあなたに差上ます私がこれを書きましたのは七月廿日の夜の一時半に筆を擱いたこ

とを記憶してください私も近日御地に伺はうとしております

あの細長い風すきのわるいおざしきでゆる〳〵と御話しする日を樂しみといたしておりますさらばこれで失禮します

橋本末吉氏を弔ふ

六月の團體の一人であつた氏は三島着後病を得て僅に三十歳を一期としてお地場の烟となつた痛恨至である

父も祈り母も禱し汝の身もあはれ命か悲し今宵よ

團員の一人缺けたる淋しさに車輪の音も低くきこえて

頭光寺のけむりは北へ流れゆく汝の靈や神にもふでし

「時代」を知れ

いくたびの匂ひがけがやつとものになつて日々と運ぶ身上はだん〳〵たすかるそこで御禮の爲いつまでも信心さしてもらつて講社加名となる

そのまゝでは心がそだたないから月に二度くらいは先方へはこぶ又教會の月次祭說教日大祭へと連ばせるどうやら教理もわかつて來たそして熱心である處から世話掛とする二度の御本部參拜で授訓者となつて役員に登用となる

しかしそれは教師の資格がのをてはと天理教校別科半歲學業に實地にひのきしんに短時日ながら精勵の結果ごうやら卒業となり申請して權訓導となる茲に初めて布教する事がでけて來るのである

思へば早いので三四年おそいので十年の月日をかさねて布教にでられるようになることを考へると一人の布教者となるまでの彼我のこゝろづかひ時日經費とかう

數ふると容易ならぬものといへるかようにして道はだん〳〵とひろくなつてゆく心はしだいに育つてくる

道は末代人間は一代で形のものにすると人間は「トタン」屋根の手輕な家でも立てる氣でいる神樣の思召は萬古に渡つて燒けぬくずれぬ堅固な大普請である

どちらからいふても「家」といふ名にかわりがないが事實は天地の相違であるからたとへ我一生涯に所長に會長になれづともそれは少しも苦とする處はない功をつみ德を重ねてその通つて來た道のあとがせめて神樣の思召の億萬分の一にでも備へられたら本望と覺悟して大きい心と大きい眼で日々を過らしてもらわなければならぬ

それが現在は心は小さく眼も小さく大きいものは「口」ばかりじやないか身に行ふのを本則とするお道に「口」斗りが生長したのでは到底神樣の思召に添ふ仕事がでけ上る道理はあるまい

まあ自分の過去を少し考へてみるとよくわかる數年間教師となるまでの道はよしや蔭の道といひながらも一筋に徹底した通り方をしたならばこそこぎつけられたのであるがさて表舞臺へ立つて「口」ばかりの人となつては自分の『過去』が自分の「現在」を見て悲慘の涙をながすであろふそして『未來』を達觀して「上すべりで終る」ことを豫知したときは如何に苦痛であるか

小さい我一代にも過去に對しては現在の誠意をもつて報はなければならぬと同時に未來に對して確い〳〵信念を立てなければなるまい

今日お道に奔走する人に此位の思案のない人は恐らくあるまい實際無いといひたい

精進すべき時代の切逼は倒れている者も立あがる病めるものは杖にすがつて働かうとしている

心身ともに堅固な人々は過去にはちぬ現在の精進とそれから未來の厚い信念とを

以て勇進し猛進すべきは今日じやないか——行け內地の寒村僻邑まで——進め言語不通の外國まで

神の惠と神の働きは內外遠近によりて等差あるべきでない苦しめる同胞は天來の福音によりて蘇生すべく方向を確立すべく人間本來の道を得て欣喜すべきは蓋し豫想の外であろふ（大正十二年三月三日夜宮內先生の囑によりて述ぶ）

空頭録

○

所長は老衰して信徒の振はなかつた某宣教所は或る機會に所長變更か移轉でも
と備忘録を汚しておいた
すると新築が致したい勿論或る家の材料を使用して神殿だけの新築をしたい三千
五百圓は見込んでおりますと意外な話に俄に信じられない
寄附の帳簿を見ると成程收支はどうやら行くらしい最終の所長の名で金〇圓とあ
るのに氣がついた
此所長さんが此れだけの出金は堪えられない飾りなら改めてもらひたいと切込む
と所長さんの云ふのには私もこれ迄内々事情がありましたが今回は御蔭げで治ま
りまして小供等も相當の事をいたしております處から勇んで出して呉れますので

喜んでおります決して體裁に書きましてのではございませんと誠をあらはしての
話
さう云へばH頃に増して顔色もよく見える話の筋も立つている虚言であるまいと
備忘録のその頁は抹殺した
それから私は考へた此改築は突然をして決して突然でない所長の家庭が圓滿に運
ばれて内も外も子供等が順序立てくれるやうになつたのが基礎であつて茲にそ
の美果となつたのである
これを思ふと行詰りや衰やは所長會長の精神の改め方による事を一層心づ
よく感じた

○

助け一條の爲とあつて授訓を運ぶ教徒さんには深い敬意を表するが中にはお授さ
へ戴けば流行病にかゝらぬとか安産するとか旅行しても安全であるとかと誤解す

る人には困つている

元來授訓とは助け一條人助けの爲に一身一家の心を澄まし布教に出ても內々事情の生じないやうにして御神恩の萬一に報い奉る爲に奔走さしてもらふ處から無くてはならぬ授訓であつて若し布教に出ない覺悟なら運ばしてもらふ要はない

授訓は心であつて形ちではない夫れがあしき拂てと唱へて行ふまでは皆同じであるがその行ひや唱へが果して神樣の御受取だくさる人が何人あらう

常々の心日々の心我身忘れて助け急ぐその精神は世界無二の寶である正味である正味のない空な形ちや唱へは如何に聲高くあるとも如何に格好よく見ゆるとも空はどこまでも空である授訓を運ばれた人は一考してほしい

○

求むる人に與へるのは易いことで無意識にある人には少し骨が折れる進んで求めたくないとの頑固である者にはその上一層努力を要する

御道も求むる人には行渡つたやうに思ふ更に第二第三の人に向ふのはこれからである頂上に近づくに隨つて山は嶮はしいものである

○

竹は澤山な衣類を着て生れるが生長すると綺麗に脫いて裸一貫割つて見せたいの慨がある

人間は裸から財產を積んでそれが爲に情義を破り法廷を汚して左も平氣である

○

商人や職人の財產爭ひはまだしも慾に遠ざかれ慾を捨よと敎ゆる宗敎家で財產に目のない人が少くない

○

金儲けは六かしいといふが儲けるより散らすのが骨が折れる人間らしい散らし方がむづかしい

○

高い値では百姓が米倉を開かない定期が三十圓を前後すると驚いて倉を開いて尙安くする人間は案外賢こくないものだ

○

新橋驛が東京驛と繋つての當座銀座の商人は決して響きませんと平氣でいた一年二年の今日銀座はいちじるしく淋しくなつて或る商店などは以前の三分の一の商賣しかないとこぼしている世の中の變遷は恐ろしい東京でも銀座といへば外國迄も通つた處それが日增しに淋みしく成り往來は泥の海となる

○

東京の中心は銀座を離れて日本橋へ來たが北進して須田町となるであらう家並や大商人はないが將來は必ずさうなると思ふ

○

都會の中心の動くやうに總ての物も皆かはる時勢を見る目は遲れぬやうにしなければならぬ

○

役所と名が付く處はどうして不親切であらう教へてよい事も云はず役人でございと自ら高くするのでなからうがどうも親しみがない人民共といふた昔が殘つているのか例せば教會新設の不認可の理由など別段秘す可きでなからうが何と尋ねてもいはない職務規律を楯にとるのであらうが事によつては門戸開放堂々と説明して呉れるがいゝ

口と心かくも變るゝ我ながら
吐息をそつと人知らずする

鉛刀一振

○

別科半年資格成りて權訓導拜命と來るともふ立派な教師になつたと鼻のメートルが上がる

○

立派は完全で完全は一人前であるそして何處で一人前の鑑札もろうた無免許の怪しき完全がとても仕事が出來やしない

○

立派との自已免許はもう人の言ふことは傾聽したがらないそれは第三者に對して恥のやうに思ふている

○

知つた振で一生を通る憐れな立派な教師は年々增してゆくそれは働きのにぶいのと仕事の仕上がおそいのでわかる

○

別科なるものはそれほど尊といものじやない唯資格を與へられるだけだそれを尊重するは當然であるが別科の卒業は教師としてあらゆる卒業と誤解もしている

○

此頃の別科生は親が資金を與ふるか篤志者の保護か若くは教會より選定せられてゆくかの外に汗を流して得た學資金で入學している者幾人あるか

○

學校はそんな取調は不必要だらう月謝完納は學校の滿足である併しそれは普通の學校であつて我教校は左樣に輕視すまい

○

親の足や他人の手や教會の援助やらで造り上げられた弱武者がいざ鎌倉に先陣の手柄をあらはすもの幾人ぞ

○

私は學校もその生徒の學資金の出所に就ても一顧をして欲しく思ふ

○

私は別科にゆく人に一言の餞別を與ふるを例としているそれは期間中禁酒これだ

○

生徒の身分で誰れかの御蔭で修養中の者がよし獨酌にせよ醉ふて寢るなどは言語同斷だ

○

あびる程すきな酒も半年位辛抱のならぬ薄志弱行で卒業しても無論見込がない

○

極端にいふと教校で教へられた學問など皆忘てもいゝ品行が篤實で教義熱心であつたらそれでいゝ勿論それを具備した者は授業の總てを記臆しているに相違ない

○

教へられた事は忌れる布教にも出ない苦しいからとて算筆や鍬鋤を手にするものがある心得違ひの極頂で初めから商業學校か農業學校へなぜ入學せぬ教校でいつそんな事を教えられたか反省してみるがいゝ

○

教校卒業の後は所屬の親教會で働かしてもろふて完全な教師になる覺悟が第一である誰れも熱心なものは布教を急ぐは最もなれどナマクラ刀では物は切れぬことを承知してもらいたい

甘露の味

秋葉の原へゆく貨車が地響きさして過ぎたあと夜はひとしほ靜でした
新開の通りは往來もたえて上野の鐘は十二時を知らしております
埼玉縣から布敎に來た喜田さんは四五人の信徒を踏切近い家に集めて熱誠に敎理を說かれました滿足した人々は十二時をきいて各家路にと急ぎます
あとは家内の夫婦と喜田さんの三人となつて明日の助け場所を打合して神樣に一禮のべてやすみましたのが一時でしたらう夫婦はまだ寢付かぬ内に一間に休んだ
喜田さんが異樣の苦しみをしてゐるので驚いて飛起きました
それは强い腹痛でさすがの大の男も今にも死にさうなあがき方をしています
俄に神樣に燈明を獻じて主人は至誠祈願しております妻は看護いたしますがどうも治まりさうにない

喜田さんはその惱みのうちに分敎會〳〵と申しますので主人は心附いて稻荷町へ一飛びで寐入つた分敎會（その頃は東分敎會といふた）の門をたゝきました
時間外れのことゝて何れ急變と私は急いで門をあけますと實は喜田さんが非常な障であるから同道してくれとのことに委細承知と神樣に御願ひしてすぐと同道しました
喜田さんはもう死ぬもう死ぬと連呼しての苦しみですさうもありませう一通りの惱みでない
私は十分間の御願をして御授を願ふて靜に喜田さんの頭を私の膝にのせてあげました
勿體ないことに惱みはよほど御守護をいたゞきましたので喜田さんは落附いて時々大きい呼吸をして今しもなやんだ事を思ひだしてふるへています
一體布敎にと運ばしてもらうものは何日家にかへるといふことか定められない隨

つてその妻とある人は能く夫の心を心として留守は少しの心殘りのないやう安心して布教に出てもらうやうにしなければならぬ

しかし喜田さんの妻は貞操な人ではありますが田舍育ちの悲しさ世間知らずであり又教會へは大慨喜田さん自身で運ぶから妻はいつも留守居ばかりで御道には大層おくれています

夫の熱心の割合に妻はそれほどでもない處からつい不足をつけやすい

それには色々な事情でつまりは物の不自由や仕事の分らぬことやが元となつて埃をつけることになります

喜田さんは猪武者で何日でも留守にするのは平氣で旅から旅へと飛んでありて布教していますから益々心もできますが妻が今いふた形ちで物にたとへると前の荷が重くて後が輕いやうなものでありました私は不圖そこに心附きまして喜田さんに徐々にそれをさとさしてもらいました

思ひ當つてか時々かすかに返事していましたが私は苦しみのあと清水がほしからうと氣付いて水を乞ひました

大きなコップに澄み切つた水をくれましたから私は靜に喜田さん一寸水をおのみなさいと告げました

するとその喜びといつたら一ぱいあつた水をきれいに呑んで嗚呼いゝ心もちになりましたと聲を上げての歡喜でした

さうかうする内にもう東がしらんで鷄の聲もきこえます喜田さんは床に移されて心地よげに休んでおりますから私は暇を告げて歸るともう朝のおつとめでありました

喜田さんは翌日主人と同道して無限の感謝を神様にさゝげていましたそして私にかう申しました

お話をきかしてもらうている間に水がのみたいと思ふて濟んだら呑もうと期して

いた處へあなたの心付きで水を呑まんかと云はれて飛上りたい計りにいたゞいた水それこそ甘露の味でありましたあんなおいしいものは生れて初めてでした

こんな事を繰返して喜田さんは歸つてゆきました

喜田さんは丈夫な體で今以て盛んに布教していますそして逢ふた時はいつも水の話をして今更のやうに感謝して居ます

鐵道改良で秋葉ケ原へは近く高架線となつて貨物計りでなく旅客をも運ぶやうになりませう

けれど喜田さんはます〳〵低いやさしい心で報恩の爲に熱烈にお道の上を働かれませう思へば一杯の水それが偉大な効のあるのも心が添えばこそです

心の尊ときその働きそれは神の與へられた至寶でせう

弔詞

畏友木村八十八氏大正九年霜月二十八日俄に歸幽こえて十二月二日染井の齋場に行はれた葬儀その柩前に朗讀したるもの素より世にとうべきものならねど埋草にとこゝに掲ぐ

木村さん——木村さん

かくお呼びかけ申してもお聲も聞えぬ柩の中とおなりになりました殘念でございます

健やかなその御姿老の身の杖さへ用ひない御丈夫——それももふ御逢ひ申せなくなりました

生者必滅會者定離——と申しながら悲しい事でございます

思へば三十年の間の清い御生活——とは申せ惱みと苦しみとは朝の涙夜の悲しみ

となつてあなたの骨は碎かれあなたの肉はそがれたでございませう
それもこれも道の爲又敎祖の足趾と苦もなさらないで古稀といふ七十の坂世にも
珍らしい八十といふ老齡に唯一筋の神樣への奉仕——貴いともふしてこれほど貴
いといふ事がございませうか美くしいと申してこれほど美くしい事がございませ
うか
此世に生れた——人としての立派な仕事を成し遂げられたのは實にうらやましく
存じます
あなたの後は市三郎さんがひかへて木村の家の礎は確固なものでございます又深
川分敎會——あなたの必生の事業であつた其敎會の後任も極月十七日會議は致し
ますが多分日頃の御希望に添ふことゝ私は推察致します濁りきつたこの世のこと
はもふ何事も御心殘しを爲さいませんで澄んだ淸らかな神樣のおそばへひとすじ
においでください

君ゆかむ八十のくまじは遠けれど神ゐますなり心やすかれ
みいさほの高くありける君なれば正しき神と成り給ふらむ
では私も申上ることはありません唯あなたの御亡骸の爲に染井の森にたのんでお
きます
墓地寂寞として夜猿叫び古木欝蒼として寒鳥騷ぐ——その心細い處——どうぞ
雨が降つても御墓をよごさぬやうに風が吹いても墓標を動かさぬやうに
そして染井の土にもふしておきます——ひとりで淋しく埋もれてゆく方をようく
親しんでくださいこれからはつめたい冬が來ますどうぞ氷らむやうに寒くないや
うにようく圍んでくださいさればでございます——三十年の永い〳〵おなじみの
椿は今悲しみに堪えないで失禮いたします

川口行

今にも降りさうな空に洋傘をすてつきがはりと上野驛に至るともう大須賀文學士は人待顔であつた

六時〇五分大宮行の列車は座席があいて居たので放談して川口町についたのは六時四十分

出迎の人に導かれて會場へ直ちに行くとそこには二味大佐も先着して居られた

八時の開催時間には古田敎正で次が自分の拙辯に三十分を空費して大須賀二味の兩氏の順で十時半解散した學者らしい落付いた大須賀氏の祖國日ノは聽衆に大なる自覺を與へたであろふ

國民の元氣とあつた題を俄に婦女子向とせられた二味砲兵大佐の快辯には聽衆は大滿足らしかつた

そして前回と同じやうに滿堂であつたことがうれしい

特に注目すべきは前回には僧侶の聽衆に交せりしと今回は救世軍の士官が熱心に筆記しておつたなどは異色とするに足るわれ等はこの川口町の鑄工場の職工諸君の熱心なる聽衆振りに多大な敬意を表して止まない

七月は更らに辯士を替へて益々熱烈に講演したいと祈つている

腐腸空頭

御同様にかうして土の下に葬られてはもふ行止りで世の中にわるい風潮があつても人間が不實になつても腕をするだけでいや意氣地のないことじや

御尤々々變る世の狀は殘念でならぬ併し上調子と粧飾とは殊に甚だしいと思ふ

累々たる石碑の中にすぐれた大きい碑の下にこんな聲がする

いづれは世にあつた時には働らかれた眞面目の人であらふ

物語りはつゞいて松の調べも折から共鳴りしているやうである

わしらがやつて居た時は僞といふものがない正味であつたその代り見悲くかつたであろうが天に通じる力はたしかに強かつたそれに今のものはどうじや寄るとさわるとやれ規則じや法じやと立派に見せたがつて其運用する力の皆無に心付かず飛んだりはねたりしているそんなことで人助けもすさまじいなんとさうは思はぬか

さうだとも肩書をいくつも付けて金口の煙草で人を煙にまくのは上手になつたそしてその言譯が面白いじやないか時代がかくせしめるのだとさ

時代を導くかそれとも時代に引ずられるか今の處先づ引ずられているのであろふいやもう石碑の下へはいつて仕合せ若しも生きていたら毎日議論の花は咲きどふしであろふあゝいやなことじや

それからね此頃では館が立派でないと信用がないそして不便だとあつてやるはあつちでも新築こつちでも新築とあつて木の高かろふが鐵が上ろふがおかまいなしそのくせ急ぐものでなかろふが先づやりたいといふだけのことであるとさ

いやもう信用を外から糊付にしたり羽織らしたりするからすぐと風にも飛ばされる現金の世の中になつたものじや

御互にほんとに戀ひしいのは昔じや辛抱やたんのうは身を責めてもやつたそして
如何にも愉快にやれて來たが今ではこちらがたんのうの卸小賣でございと人に拂
ひ下げをする賣るのが急がしいので自分はちつとも食べてはいない賣るのは名人
ぢや
そんな事だから借金だらけで首も廻らぬあはれなことじやないか
双五の嘆息は微に入りて止め度がない曉の鷄の聲は終に中止せしめた私はどこか
それを聽いて力づいた心もちがした折を見てまたきゝたいと思ふ

教壇我と家庭とに九格の
二重ある身ハひとりて泣きぬ

尾崎松之助君に與ふ

近來めきゝと大人びてどこへ出しても立派な男草葉の影から亡父芳松君も會心の笑でせう老父と母の丹誠が君といふ結晶體となつて現れたものといつてよい
中學を了つて專門にとの望みもあつたでせうがそれは家庭がゆるさなかつた
それでも教校では第一番で卒業して名譽の冠が君の頭に宿つた時は君の母が涙ながして喜んだでせうそして亡父の靈にはいち早く告げ白したでせう
父に早くはなれたことを別として君は幸福なものだ温かき家庭に人となつてこゝまで修行しられたのは實に望外の喜びであらねばならぬ
老父はもう七十六壯健といふが高齢であるそれを助けて小にしては孝の道大にしては教務の爲めあらゆる忠實なる精神をさゝげねばならぬそしてそれは實行もし

また豫期もあらうと思ふ
私の君に言ふ處はこれからだ君はどうもギス〳〵してゐると人がいふた日もあつた
けれど私は打消した
なぜなればさう見えるのは君の言葉遣ひが下手であるからさう感じられるのであつて實際にそんな事がないといふのが私の實感だ
それから情がうすいともいふがそれも同上の理由で非認した私は充分君を知つてゐるから皮相論には雷同せぬ
說敎も近頃は調子がおちついて大家の俤がある
私はそんな事をこゝで君に言ふのではない
私のいふのはいよ〳〵これからだ
溫室といふと君はおかしく思ふがどうも溫室から君は育つて來たといふことが至

當と思ふ
なぜそれをいふか
若しも君が或る年限の後に牛込分敎會長拜命の日が事實となつても君は人知らぬ涙の日がきつとあると思ふ
私はかう言ふ
苦勞がたりない
實地に經驗をもたぬ
これが君にいふ苦言だ
それを具體化すると個人傳道だ今日は團體を重んじているがその團體傳道も個人傳道から仕上げたものでなければなるまい
だから茲しばらく個人傳道それも他人が道をつけた處でなく自分で匂ひがけしてそこから成立さしてゆくことが必要である

現在は君をさうして傳道させるほど教會にひまはあるまい
けれど若い時の苦しみは人のものを買つてもせいの諺がある
今やつておくことは一生涯の寶になる前途を照らす光明になる私は君をかりてこれを言はしてもらつた
けれど同じ意味に讀んでもらいたい人は澤山あることを斷つておく

仕事の樂

（第二修德會講演の大要）

（一）

本日は例會でありまして多數のお集りを得ましたことを深く感謝致します
先月は初ての開催でありまして御參集の中では善いことであるが實行がむづかしいと申された方もありますやうに伺ひましたそれまでも心をよせておきゝくださればこそ皆さんは人格の高い結構な方になられるに相違ありません
肌寒い正宗も粗雜な鐵から成つたものでどんな埃だらけな心でも神樣のおめぐみと眞底からのざんげで必ず充分なお助をくださることを私は保證致します

（二）

ふじゆなきよにしてやらう神の心にもたれつけと申しますのは我教祖が御神樂歌

に於て示されましたもので御聽の如く神の心則ち眞であればふじゆの無いやうに守つてやらうとの思召であります私はそのことに就てこれより暫時お話いたしませう

今日の世の中は何かにつけて粧飾の多いことでありまして世間體をつくらうといふのが一般になつております

木綿でよいものが紬をきたりつむぎで至當であるものを七十の羽織といふやうに身分……身の程を忘れてのかざりをしております

形式は內容の爲めの形式といふことである力だけのことでよいものを無理に善く見せたがるのであります

又學問も教育もない人が已れは利功だ賢いと强ひて賢く見せたがりまして言葉のあとから間違ひだらけな言句があつて人が笑つていてもそれを知らずに賢こがつております

もふ一つは慾のつよいことです我身計りといふ寸法で人のことなどはちつとも氣にかけず自我一天張りであります

唯今上げましたやうな人が多いのであつてそしてそんな人に限つて働くのが大儀がりますつまりなまけものです

(三)

鯨は昔し陸上動物であつたものが怠けもので海にはいつた爲に手足がなくなつたと傳へております

我々の四肢五體はいづれも働けるやうに神樣がおつくりくだされたのであつて若し人の世から仕事といふものがなくなつたらどれほど無意味のものになるでせうぼんやりとした人ばかりで食が過ぎたり不足だつたりして何れも病人だらけ醫師まで仕事がないので病人となるであらふ言ひ換へれば働きは天より與へられたる健康素といへる

實に神聖なるものである人間から働らきをさつてしもうたら人間がなくなるのである

そして一力からいふと働らきに依つて自己を知ることもできる自己はどれほどの力が授かつているかは働らいてから知れるのである

此正直に影日向なく働く事が神の心にもたれつけるのである

（四）

間斷なき勤勉は能く山海を移動すといふている

大阪の天保山をつぶして築港する時の材料とした石を備前の犬島からとつた實に大した數であつた

一方築港が完成に近づくに從つて犬島は漸次切取られて島が全滅したのが能く其例を示しているじやないかこんなことは何處にもある

たゆみない働らきは實に恐るべき大なる力である

私はお話をだいぶ擴げてしもふたそのおさまりをつけなければならぬ

怠けていて慾のつよい人の多いことを申しましたが時下の弊をうがつた不人情なおもしろい實例をひとつ御話しませう

或る田舍の小學校の敎師が永年勤續していたが此度國元へ歸るといふ處から子供を世話になつた親たちが集まつて何か御餞別しやうぢやないかと發議するといづれも大贊成ではあるがあまり富有のものもないので一つの樽をもつてきて銘々に一瓶づゝ葡萄酒をもちよらふといふのがまとまつた話であつた

村の便利な處へ樽を置いて四方からそれにあけてゆく葡萄酒はもふ樽にいつぱいになつた

栓をしてのしを付けて皆の心の集り輕少ながらと敎師に呈上したからそれは名譽な品だと喜んで汽車積にして國元へ持參した

（五）

さて親族や知己を集めて村の人の親切をあつめたものを御馳走したいとふれたから夕方から多くの人が集まつてお目出度おめでたうと祝つてくれる

肴はなにもないがと樽の口をあけてみると水のやうなものが出てきた

これは底の方へだけいれておいたのであらうと段々出してみても酒らしいものは少しもでてこない出しては捨てすてゝは出しその内にもふ明樽になつた

別室では酒がもふ出るかと盃をひかへて待つている

こちらは水ばかりで非常に苦心しているこんな事じやないがとおもふても終に一滴の酒さへ見なかつた

そつと人を酒屋にやつて買入れた葡萄酒で御馳走してその場はすましておいたが晴れぬ不思議は村の人の心である

間違つてあつたのかそれとも故意かどうも合點がゆかぬ

木蔭すゝしく

それから村へいつて色々とそれとなく聞き合すとその村の人等は上邊を奇麗に見せて存外なけちんぼ揃ひであつた

或る一人が思ふのに皆の者が酒をもつていく自分だけ水を入れたとてさうはわるくはあるまいと考へて水を酒とみせかけて入れたものだ

根がけちんぼであるからその人の考のやうな人計りで我も我もと水計りもつていつた

樽から酒が出ないのは至當でつまり水計りの送りものであつたことがわかつて教師は苦笑を禁じなかつたといふ事である慾や不眞面目な怠りものやが多いから罪の絶間がない

仕事幽靈飯辨慶といふて食ふ丈の一人前はちと考へものであろふと思ふ

（七）

つまり自分の今日從事している仕事が天與のものである神の御授けくだされたも

のである
此仕事に勢力を集注して一生懸命にやることが神様の心にもたれつけるのである
それから我一人といふ心では大なる仕事はでけん
あちらからもだせば一つのちからこちらからもだせばひとつのちから四方から
あはせてなつたら風ふいても倒れはせん
これは心を合せ力を集めて仲よう仕事してゆく集つた力の大丈夫であることを教へられた御言葉である
心を合してゆくことはこちらが低い心で人に樂をさして自分で苦しむのでなくばとても目的を達しることでけん
劍が短かければ一歩敵に近づけであつてこちらが蹈込んで行かなければやれるものじやない
これからは世界の人がおかしがるなんぼ笑てもこれが第一

とおきかせくだすつてある
善いことをしてそれを笑ふ人はよからぬ人である正しく歩んでそれをそしる人はその人が不正な人である

（八）

どうか天與の仕事と定めて眞面目に働いてくださいそこに神のおたすけがあるのです
笑はれてもそしられても人らしい正しい道をふんでください
それには神のみちびきがあるのです
慾の世界には正しき人が不具者視せられます怠けものゝ多い仲間で働らくものは狂者視せられます
併し人にそしられ笑はれるとも神の御心に叶ふことが尊といのです狂者視せられても天理にかのふことが畏こいのでありますそしてその行ひくださるあなた方の

前途は實に光明界であります行末のたのしみな道であります神様のおいさみくださる道すじであります

○ 梅

風さむみまたきえやらぬ雪間より春を知らする宿の梅が枝

○ 春川

水上のゆきげそめてやきのふけふみかさまさりぬ薄泥りして

○ 千葉途上

しもさゆる月夜の山路ふみわけて鳥叫ぶ聲の山彦をきく

青年の郷土に歸れるを送れる歌

汐風の濃く吹く夕べ汝と見し興津の濱よ汝れは十三

△

風呂も焚き使も走り一筋に神に仕へし汝れの十年

△

羽衣の松のあなたの不二見村汝れは歸れり今年極月

△

都にて修めしなれの聖業よ幸あれや三保の松原

△

白妙の富士の高嶺は汝れにこそ氣高くあれと敎ゆるものぞ

△

うちよするその白浪によく堪ゆる巖ぞなれの心ともせよ

△

漁夫もよし田家も神の與へなりされどほとりの靜岡を知れ

△

人家三千東海勝區と唱はるゝ靜岡こそは名をなすの土地

△

山名とてさまでの力なしときく進め靜岡四通八達

△

されど聞け花はその根を培ひて匂ひもあらん人も愛でなん

△

忍耐もまたたんのふも理解せる汝れにはあれどたらぬちからを

△

五ッ紋木綿羽織は汝の晴衣あだし心をもつな夢にも

△

打よする波のさゝやき吹き荒ぶ風の音こそ神の御聲ぞ

△

ゆけやゆけ神は守れり眞心をはれある汝を見ん日待たるゝ

（九、一二、一八稿）

公開狀

須賀本徳一郎君へ

北海波荒らい不便な地に孤身奮闘神命を傳ふべく百難と戰ふて倒れず千患も驚かず道の爲に努力を怠らぬ須賀本徳一郎君に深く敬意を表して私は此一書を君に捧ぐる

私は君の名を屢々雜誌の上で知つて居つて未だ親しく面會する機會がなかつた

大正七年と思ふ君の妻君は愛兒を連れてこれから相馬分教會で修業さしてもらふ心得で上京しましたとのことに私は或る悲哀にうたれた

君がこのうら若い妻君を海山數百里遠く相馬に遣るのには云ふべからざる苦痛が伴なふているのに思ひ至ると涙の下るのを覺えなかつたと同時に君は男らしい勇斷と先見の明のあるのにも敬服した

君の愛妻は能く辛抱してみかぐらの歌をうたひながら巨大なる相馬分數會の臺所に勇んで立働きをつゞけてゐたそして愛兒は存外おとなしくて人手をからずによく遊んでゐたことを記憶してゐる

時到つて君は三四の信徒を連れて慕はしい親教會を經廻りて大教會で初て私は面會した

果然私の考へは誤らなかつたことを喜んだ活潑な忍耐に富んだしかも斯道に熱烈な君と對談するに及んで私は敬意を深くした御本部にいつて授訓も了つて嬉しさの溢れたまゝ手を携さへて青森海峽の波濤も忘れ千里廣漠の原野のうみ易い北海道の鐵路もさのみとせず枝幸の故郷に旅裝をとかれたのはどれほど喜ばしかつたでろう

私は北海の天を眺めては何時の時に宣教所が成るかそれには君に教師の資格のことなど考へてゐた

するとその君の愛妻の凶報に接した夢のやうで信じ難いそれでも事實だと人がいふが驚きの餘り私はどうも僞りと計り思ふてゐたけれど日が經つて確かな事も知れて私は君の心中を洞察したところが三月號にかゝげた君の健げな文章に接して思はず私は泣かされたそして崇高な君の決心に私は三度敬意を表せずにいられぬ

實際君のいふ通りで道はこれからだ何でも反對の多い妨害の多いほどたのもしいことは敎祖樣の御事蹟が立派な證據である

君は愈よ〳〵檜舞臺に立つた役者だ反對と防害と冷評に滿ちた看客の中の一人役者だ一擧手一投足皆罵倒の種とせられ言草の材料を供する今日の境遇は深い〳〵同情を表する

千島あたりから流れよる氷塊のそのつめたさよりも世の人の心はつめたい北極にはりつめた氷をとくよりは人の心の方が餘程ときにくい

けれど君はこれまで一人で布敎していたなれどこれからは妻君の靈が君の行先々〳〵に君と共に働らいてどれほど補けてくれるかを忘れてはならぬ

世界中には神樣の充ち〳〵た御守護があることに孤獨で反對の中に立つて苦節を守りて屈せず熱烈はよく氷塊もとくべき堅固なる信念あらばことに厚きことに深き御守護あることは疑へぬ事實である

やれ北海の快男兒その淋しさを感ずる時は我に神の助けありの一語を深く心に銘して荒鷲飛交ふ島の果て熊行通ふ山奥もこの助け一條の道をたゆまず勤むるのが君の天命であると私は信ずる末來に光榮ある君は私の此一書を如何によんでくれるであらう

大正九年二月十八日都は春雨にとざされてさむしい氣分のみちた中で遙かに心を枝幸の大浪小浪の音に通はして君が防寒具した勇ましい裝ひでお助け先きより歸り早々爐邊に燈火に近づけて雜誌をひもといてくれる姿を思ひやりて

伊勢崎の半日

ふしぎなふしんと申しますことは形のふしん心のふしんの二つでありまして親兄弟の意見さへ用ひぬ人も神様のお話一條で永年の夢がさめる眞の行ひに歸へつた人が何萬人あるでせうそれはほんの心のふしんの一端であります

此頃は急に不景氣とやらで勝ほこつた成金といふ人達は青菜に塩となつて裝飾品を賣拂つて金の融通に遣ふまでになつております

ことに機業家は實に慘ましいほどの苦しみで上州野州は火の消えたといふのが至當と申しておくのでございます

その上毛の伊勢崎は銘仙で名高い處一反十七八圓で賣買した品が六七圓と三分一になる迄下落した今日で町のさびれるのも無理ならぬことでせう

そこへ時もあらうに此度伊勢崎宣教所を新設したいから視察して呉れとのことで

一時は少し危ぶみました

もう少し延し景氣でも直つてからとも思ふてみましたけれど乞はれることが急なので五月二十二日實地視察をしました建物は數年前のもので決して立派とは云へませんが集まつている未來の役員即ち今回新設の出願人は如何にも熱心で私共に對しておくびにも下落で困るといふやうな話しはしない

出願の順序やら認可後の經營や親教會への盡し方やをば幾度の説明を乞はれましたが實にくどくやうな事が一つもなかつた

私も實に心地がよつかた是でこそと安心したそして支廳に早々手續きするやう勸めておいたのである

これも思へばふしぎのふしんである

當事者は此高遠な觀念を永久に立通したなら宣教所の隆盛は期すべきである

午後二時五十分伊勢崎の列車はホームに留まつた見送られた諸氏に厚く謝して不